

# 平安京左京八条四坊四・五町跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告  
二〇〇六―二〇

平安京左京八条四坊四・五町跡

2007 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人  
京都市埋蔵文化財研究所







# 平安京左京八条四坊四・五町跡

2007 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



# 序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生き続けています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来 1200 年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じて広く公開することで市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成 13 年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ大規模調査までありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび八条通道路改築工事に伴う平安京跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

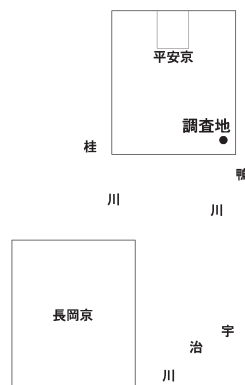
末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げる次第です。

平成 19 年 3 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所  
所 長 川 上 貢

# 例 言

- |          |   |
|----------|---|
| 1 遺 跡 名  | 平安京左京八条四坊四・五町跡                                  |
| 2 調査所在地  | 京都市南区東九条東山王町他地内                                 |
| 3 委 託 者  | 京都市 代表者 京都市長 榎本頼兼                               |
| 4 調査期間   | 2006年8月1日～2006年12月22日                           |
| 5 調査面積   | 1,385 m <sup>2</sup>                            |
| 6 調査担当者  | 木下保明・近藤章子・西森正晃                                  |
| 7 使用地図   | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「五条大橋」・「京都駅」を参考にし、作成した。 |
| 8 使用測地系  | 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した）                 |
| 9 使用標高   | T.P.：東京湾平均海面高度                                  |
| 10 使用基準点 | 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点（一級基準点）を使用した。               |
| 11 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。               |
| 12 遺構番号  | 調査区（A・B・C区）毎に通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。               |
| 13 遺物番号  | 通し番号を付し、写真の番号も同一とした。                            |
| 14 掲載写真  | 村井伸也・幸明綾子                                       |
| 15 基準点測量 | 宮原健吾  |
| 16 本書作成  | 木下保明・近藤章子・西森正晃                                  |
| 17 編集・調整 | 児玉光世  |



(調査地点図)

0 2 4km



# 目 次

1. 調査経過	1
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 調査の経過	1
2. 位置と環境	2
(1) 位置と環境	2
(2) 周辺の調査	2
3. 遺 構	5
(1) 遺構の概要	5
(2) A区の遺構	5
(3) B区の遺構	17
(4) C区の遺構	19
4. 遺 物	25
(1) 遺物の概要	25
(2) 土器類	26
(3) 瓦類	36
(4) その他の遺物	38
5. ま と め	42

# 図 版 目 次

図版1	遺構	1	A1区全景（東から）
		2	A2区全景（東から）
図版2	遺構	1	A3区第1面全景（東から）
		2	A3区第2面全景（東から）
図版3	遺構	1	A2区井戸11（東から）
		2	A2区土壇112（北から）
		3	A3区土壇210（北から）
図版4	遺構	1	A2区井戸35（東から）
		2	A2区井戸45（北から）
		3	B区全景（東から）

- 図版 5 遺構 1 C 1 区全景 (東から)
- 2 C 1 区土壙 10・11・13 (北から)
- 図版 6 遺構 1 C 2 区第 1 面全景 (東から)
- 2 C 2 区第 2 面全景 (東から)
- 図版 7 遺構 1 C 3 区第 1 面全景 (西から)
- 2 C 3 区第 2 面全景 (西から)
- 図版 8 遺物 A 区土壙 112・210 出土土器
- 図版 9 遺物 A 区道路 1、柱穴 88、土壙 135・225、井戸 35、溝 71 出土土器
- 図版 10 遺物 C 区土壙 3・53・溝 71 出土遺物
- 図版 11 遺物 軒丸瓦・軒平瓦
- 図版 12 遺物 1 錢貨 (左:表面、右:裏面)
- 2 砥石

## 挿 図 目 次

図 1	調査前全景 (東から) .....	1
図 2	作業風景 .....	1
図 3	調査区および周辺の調査位置図 (1:3,000) .....	3
図 4	調査区配置図 (1:2,000) .....	4
図 5	A 区北壁断面図 1 (1:100) .....	6
図 6	A 区北壁断面図 2 (1:100) .....	7
図 7	A 区平面図 [平安時代末期～鎌倉時代] 1 (1:200) .....	8
図 8	A 区平面図 [平安時代末期～鎌倉時代] 2 (1:200) .....	9
図 9	A 区井戸 11 実測図 (1:40) .....	10
図 10	A 区溝 3 断面図 (1:50) .....	10
図 11	A 区土壙 24・112・210 実測図 (1:50) .....	11
図 12	A 区平面図 [室町時代] 1 (1:200) .....	12
図 13	A 区平面図 [室町時代] 2 (1:200) .....	13
図 14	A 区井戸 35 実測図 (1:40) .....	14
図 15	A 区井戸 45 実測図 (1:40) .....	14
図 16	A 区溝 71 断面図 (1:50) .....	14
図 17	A 区柱穴 16・67・72、土壙 51・89・103・159・160・217 実測図 (1:50) .....	14

図 18	A区土壙 140・177 実測図 (1 : 50)	16
図 19	B区北壁断面図 (1 : 100)	18
図 20	B区平面図 (1 : 200)	19
図 21	C 1・2区北壁断面図 (1 : 100)	20
図 22	C 3区北壁断面図 (1 : 100)	21
図 23	C 1区平面図 (1 : 200)	22
図 24	C 1区土壙 3 断面図 (1 : 50)	22
図 25	C 1区土壙 10・11・13 実測図 (1 : 50)	22
図 26	C 2区平面図 (1 : 200)	23
図 27	C 2区溝 50、C 3区溝 70・71 断面図 (1 : 50)	23
図 28	C 3区平面図 (1 : 200)	24
図 29	A区出土土器実測図 1 (1 : 4)	26
図 30	A区出土土器実測図 2 (1 : 4)	28
図 31	井戸 35 出土鉄釉水注	29
図 32	A区出土土器実測図 3 (1 : 4)	30
図 33	A区出土土器実測図 4 (1 : 4)	31
図 34	C区出土土器実測図 1 (1 : 4)	33
図 35	C区出土土器実測図 2 (1 : 4)	34
図 36	C区出土土器実測図 3 (1 : 4)	35
図 37	軒丸瓦・軒平瓦拓影・実測図 (1 : 4)	37
図 38	木製品実測図 (1 : 4)	38
図 39	銭貨拓影 (1 : 1)	39
図 40	石製品実測図 (1 : 4)	40
図 41	土製品実測図 (1 : 4)	41
図 42	「京師大絵図」(慶應義塾大学古文書室所蔵)に描かれた銭座	43

## 表 目 次

表 1	周辺の調査一覧表	2
表 2	遺構概要表	5
表 3	遺物概要表	25



# 平安京左京八条四坊四・五町跡

## 1. 調査経過

### (1) 調査に至る経緯

本調査地は、竹田街道（東洞院通）と河原町通間の八条通を北側に拡幅するための道路改築工事に伴って実施した発掘調査である。調査地は、JR京都駅の南東側に位置する。当該地は平安京の南東隅近く、左京八条四坊四町・五町に推定され、東京極に沿って南下してきた鴨川が南西に流れを変える付近にあたっている。

調査区は平安京条坊復元によれば、東洞院大路、高倉小路、万里小路、八条大路にあたり、それらの検出が期待された。また、四町の北西部は八条院領、五町は平安時代末期の平宗盛の屋敷地に比定されている。

### (2) 調査の経過

調査は8月1日から開始したが、調査予定地内には立木、ブロック塀、門扉などの構築物が残されていたため、まずそれらを撤去する作業から始めた。次に調査区を囲むネットフェンスの設置、敷地内のアスファルトの撤去などの付帯工事を8月9日まで実施した。

調査は、敷地が道路や通路によって分断されているため西側から大きくA区、B区、C区に分けて実施した。調査面積はA区834㎡、B区は264㎡、C区は287㎡である。A区とC区は、排土置き場の関係から調査区をさらに3つに分けて調査をした。本格的調査は、8月10日からA1区の機械掘削を開始し、12月22日に終了した。

調査中、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の現地指導を、8月25日、8月31日、10月20日、11月14日、12月7日の計五回受けた。



図1 調査前全景（東から）

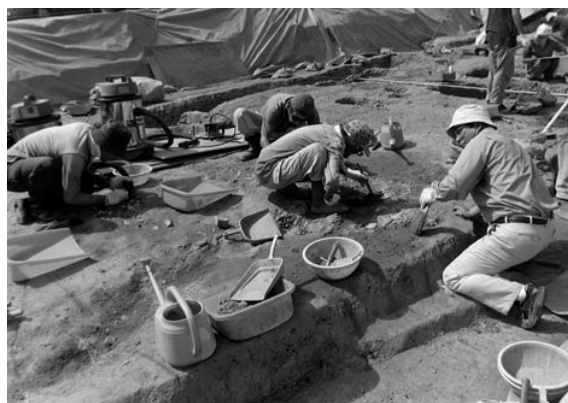


図2 作業風景

## 2. 位置と環境

### (1) 位置と環境

調査地はJR京都駅の南東側に位置し、約400m東に鴨川が南流する。したがって、調査地は鴨川の氾濫の影響を受けやすい場所にあり、遺構成立面もすべて砂礫層である。遺構面の標高はA1区で26.4m、B区で26.7m、東端のC3区では27.1mである。

調査地は、平安京の南東隅近くの平安京左京八条四坊四・五町にあたる。平安時代前期の宅地内の実態や所有者は明らかではないが、後期になると、四町の北西部は八条院領になる。ちなみに、東洞院大路を隔てた西隣の左京八条三坊十三町は八条院領の中心である八条院暲子内親王の御所である。五町には太政大臣藤原実行の邸宅が存在し、のち内大臣平宗盛の邸宅となる。八条院領は14世紀の初め東寺領となり、職人の町（八条院町）となった。15世紀以降は文献の記載も少なく、応仁・文明の兵乱をへて農村化していったものと思われる。慶長年間に、河村瑞賢によって高瀬川が開鑿されている。

### (2) 周辺の調査（表1、図3）

調査地北西部にあたる八条三坊十一・十四町の京都駅およびその周辺での調査（表1-1）では、平安時代前期から後期の自然流路、鎌倉時代から室町時代の町屋建物やそれに伴う溝・井戸などを検出している。また鑄造関連の遺物も多量に出土しており、八条院町の様相を明らかにした。それ以前にも京都駅周辺では多数の調査が行われており、平安時代前期から近世に至る調査成果

表1 周辺の調査一覧表

No.	遺跡名	調査期間	遺 構	文 献
1	左京八条三坊十一・十四町	1993.06.23～1995.03.02 1～8	平安前期～後期の自然流路。鎌倉の町屋建物、井戸、南北掘立柱柵列、土壇、南北溝、室町小路。	『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』『平成6年度 京都市埋蔵文化財調査』
2	左京八条四坊二町	1978.10.01～1979.03.31	平安後期～室町の遺構・包含層。	
3	左京九条三坊十六町	1979.07.02～1980.01.31	平安後期の掘立柱建物5棟、柵列5条、井戸5基。鎌倉の土壇7基、井戸20基。室町の井戸6基。	『平安京左京九条三坊跡』京都駅南口第一種市街地再開発事業に伴う埋蔵文化財調査概報 昭和54年度
4	左京九条三坊十六町	1981.03.14～1981.07.15	平安後期の井戸19基、土壇3基、溝1条。鎌倉の井戸2基、土壇3基、溝1条。平安～室町の柱穴50基。	『平安京左京九条三坊跡』京都駅南口地区第一種市街地再開発事業に伴う埋蔵文化財調査概報 昭和55年度
5	左京九条三坊十六町	1981.05.16～1981.06.09	平安～室町の包含層。	『平安京左京八条大路跡』八条通地下横断歩道建設に伴う立会調査概報 昭和55年度
6	左京九条三坊十六町	1981.07.27～1981.08.24	平安後期の柱穴70基、井戸6基、土壇4基。鎌倉の井戸1基、土壇3基。鎌倉～室町の柱穴60基。	『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要（発掘調査編）』
7	左京九条四坊一町	1993.02.12～1993.02.26	江戸の溝（暗渠）、土壇、ピット。室町の溝（暗渠）、ピット。	『平成4年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
8	左京九条四坊八町	1980.03.21～1980.04.01	中世～近世の包含層（鴨川の氾濫）。近代の土壇2基（旧耕土面より）、用水路またはため池状のもの。	試掘調査
9	左京八条四坊五町	1976.06.15～1976.07.09	江戸時代の土器溜、近代以降の井戸瓦井戸、木組井戸・耕作用水路。-1.5m以下、鴨川の氾濫堆積。	『平安京跡発掘調査報告 左京八条四坊』1977 平安京調査会

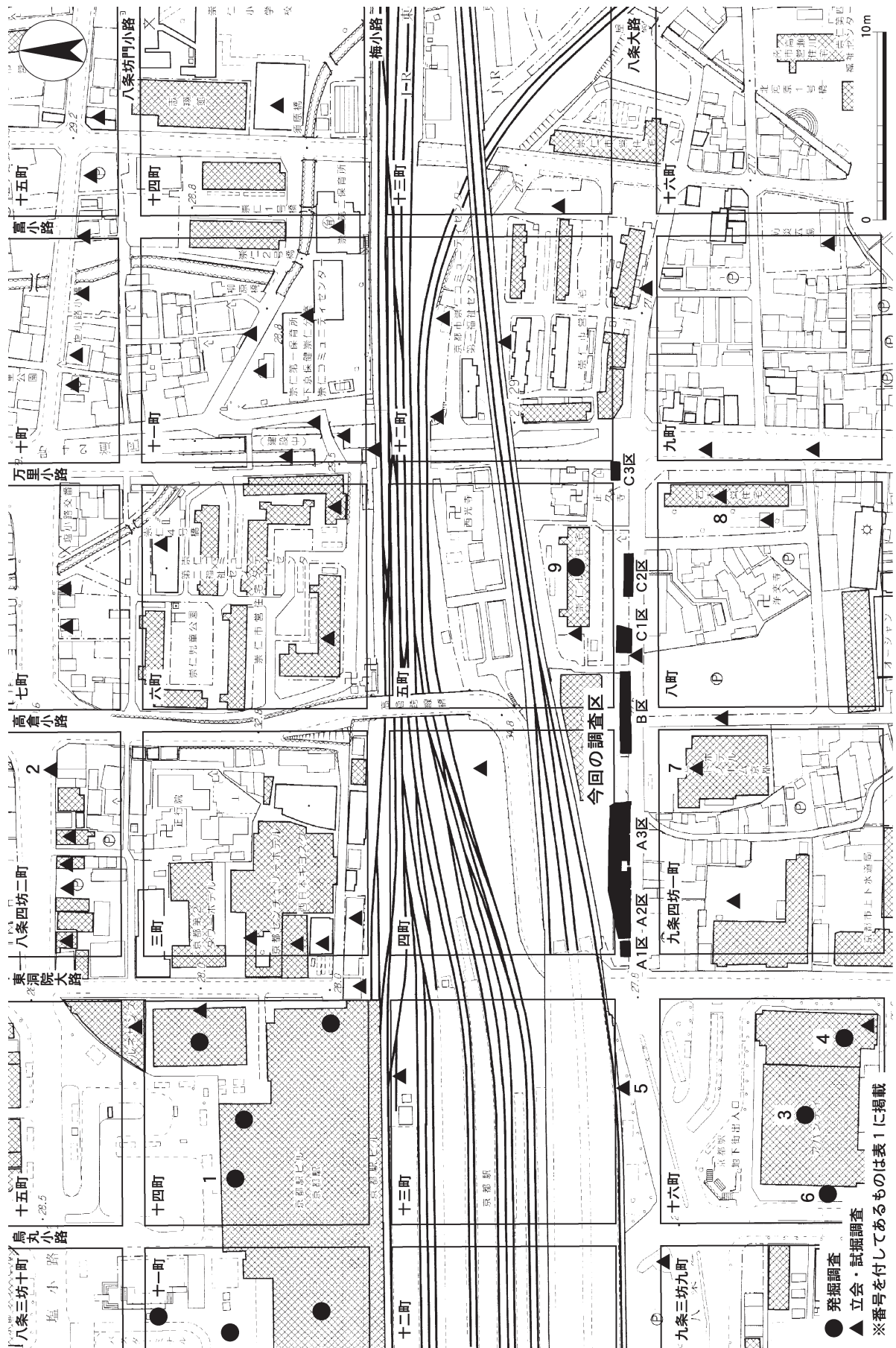


図3 調査区および周辺の調査位置図 (1 : 3,000)

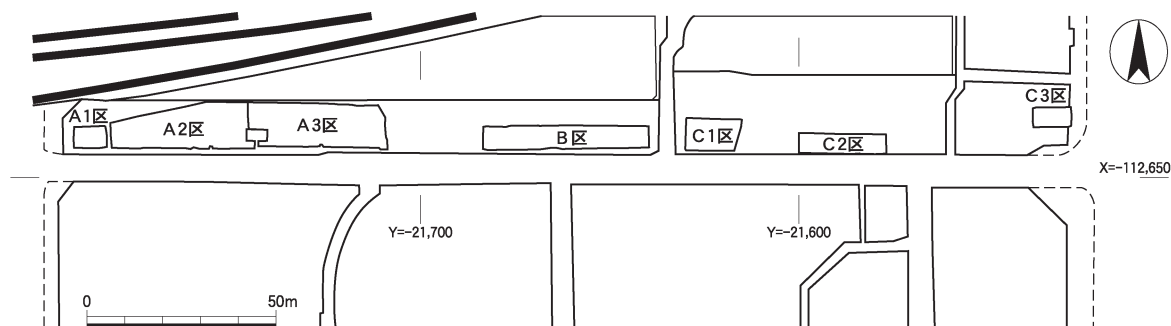


図4 調査区配置図（1：2,000）

がみられる。

調査地北側の八条四坊二・三・六・七町、北東部の十・十一・十四・十五町では立会・試掘調査などの小規模な調査が大半である。顕著な遺構はほとんどないが、室町時代の包含層を二町、十一町で検出しており、それ以外は氾濫堆積と思われる砂礫層を確認したのみである。

調査地南西部の九条三坊十六町にあたる京都駅南口地区の再開発の伴う調査（表1-3～6）では、平安時代後期から室町時代の遺構と多量の遺物を検出した。八条院町は、八条大路の北側が中心とされていたが、南側のこの調査でも鋳型などの鋳造関連の遺物が出土した。このあたりは今回の調査地と東洞院通を挟んで隣接するが、遺構が顕著に残存している箇所である。

調査地南部の九条四坊一・八町も立会・試掘調査が大半であり、氾濫堆積と思われる砂礫層を確認したのみで、発掘調査に移行する成果はなかった。

調査地のC区に北接する調査（表1-9）では、江戸時代の土器溜、氾濫堆積を検出している。

また、今回の調査地とは様相が異なるが、南に200mのあたりでは古墳時代の遺構や遺物が確認されている箇所がある。

### 3. 遺 構

#### (1) 遺構の概要（表2）

A区で検出した主な遺構には、平安時代末期から鎌倉時代の東洞院大路とその東側溝と築地内溝、八条大路北側溝、井戸、土壌、室町時代の遺構として八条大路北側溝、井戸、土壌などがある。

B区では、鴨川の氾濫堆積のみの検出で、一部江戸時代の耕作土の堆積が認められたが、近現代の遺物を含む遺構が検出されただけである。

C区で検出した主な遺構は、江戸時代の溝、土壌などがある。

#### (2) A区の遺構

##### 1) 基本層序（図5・6）

地表下1.1～1.5mまでが現代の盛土層で、その下に幕末のものと思われる大量の土師質の胞



衣壺を包含する暗オリーブ褐色粘質土層、江戸時代の耕作土である黒褐色土層の順に堆積する。その下が、遺構面となる砂礫層を中心とする堆積層となる。砂礫層は、平安時代以前の洪水堆積と思われ、後述するB・C区の砂礫堆積とは様相を異にし、遺物は出土していない。

## 2) 平安時代末期から鎌倉時代の遺構 (図7～11、図版1～3)

道路1 (図7) A1区の西端で検出した南北方向の道路で、東洞院大路に比定される。長さ約4mを検出したが、幅は不明である。路面の厚さは0.25～0.4mである。0.05～0.1mの層が3～5層堆積し、各層には径3～5cm大の礫、土師器の皿の細片が多く含まれ堅く搗き固められている。南壁の断割りによる観察により、路面の最下層に土壌を検出し、中から完形の土師器の皿が1点出土した。出土した遺物は、ほとんどが路面の補修に用いられた土に包含していた土師器の皿で、平安時代末期から鎌倉時代にかけてのものであるが、最上層からは室町時代のものも出土している。これらのことから、この付近では東洞院大路は平安時代末期に造成され、室町時代まで機能していたと思われる。

溝3 (図7・8・10) A区の南辺で検出した若干蛇行するが東西方向の溝で、道路1の東約2.5mから始まる。検出した長さは、途中攪乱によって切断されているが、約80m(2/3町分)である。幅は0.7～1.1mで、深さは0.25～0.4mである。断面はU字形で、埋土は褐灰色の砂質土を中心とする。古墳時代の須恵器の杯・播鉢、平安時代前期の須恵器の杯、土師器の甕、緑釉陶器の椀、灰釉陶器の椀、平安時代末期から鎌倉時代の土師器の皿、焼締陶器の甕などが出土しているが、全体的に出土量が少なくかつ小片のものが多し。八条大路の北築地の推定ラインより約4.5m南で検出しており、八条大路の北側溝と考えられる。

溝4 (図7) 道路1の東側に接して検出された南北方向の溝である。幅は北壁部では0.6m、溝3の南肩の延長部から南(八条大路の道路部分)で幅が拡張し2.2mとなる。深さは0.25～0.4mで、埋土は黒褐色シルトが中心となる。平安時代末期から鎌倉時代の土師器の皿、室町時代の土師器の皿、瓦器の羽釜、輸入青磁の椀などが出土しており、この溝は室町時代まで機能してい

表2 遺構概要表

時代	遺構		
	A区	B区	C区
平安時代末期～鎌倉時代	東洞院大路(道路1)・東側溝(溝4)・東築地内溝(溝7)、八条大路北側溝(溝3)、溝5、井戸11、土壙24・112・130・135・210・225、柱穴88・113・129		
室町時代	八条大路北側溝(溝71)、井戸35・45、土壙41・51・63・76・89・103・140・159・160・176・177・215・217、柱穴16・67・72		
江戸時代	耕作土、包含層		溝50・70・71、井戸2、土壙3・10・11・13・24・29・36・45・53、畦畔73

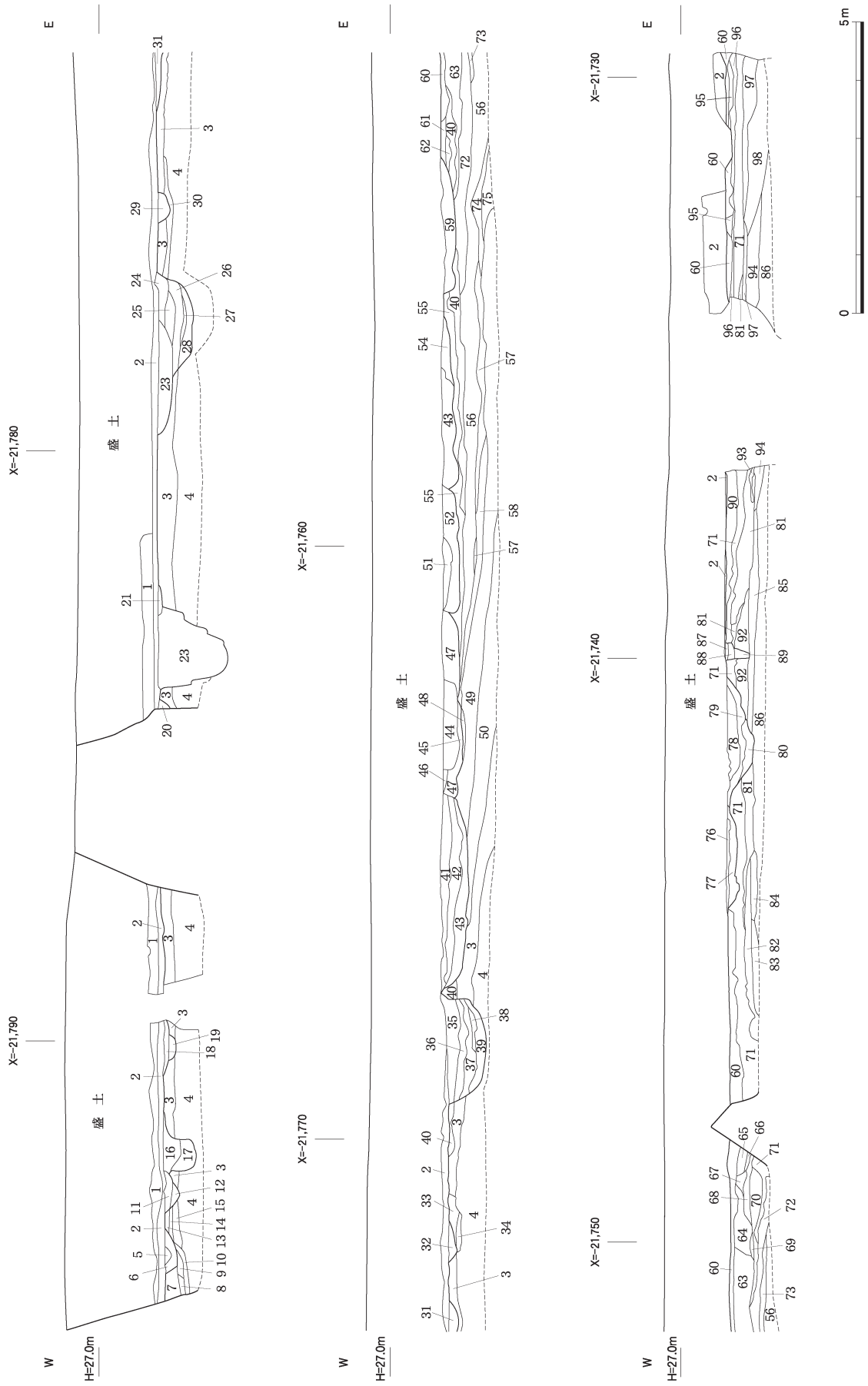
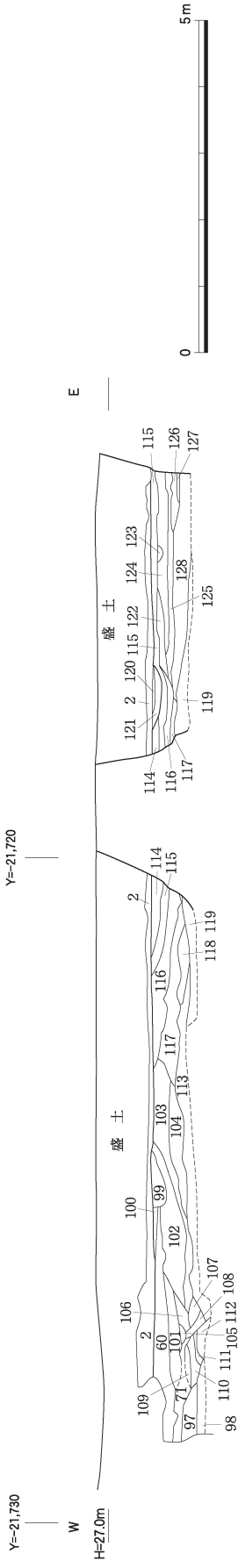


图5 A区北壁断面图1 (1:100)



- |    |                               |     |                             |
|----|-------------------------------|-----|-----------------------------|
| 1  | 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質土            | 97  | 10YR3/4 暗褐色砂礫               |
| 2  | 2.5Y3/1 黒褐色砂質土                | 98  | 2.5Y4/1 黄灰色粗砂               |
| 3  | 2.5Y2/1 黒色砂礫                  | 99  | 5Y4/1 灰色砂質土                 |
| 4  | 2.5Y3/1 黒褐色粗砂                 | 100 | 2.5Y3/2 黒褐色砂質土              |
| 5  | 10YR4/1 褐灰色シルト                | 101 | 2.5Y3/1 黒褐色砂礫               |
| 6  | 10YR3/1 黒褐色シルト質粗砂             | 102 | 2.5Y4/1 灰黄色砂礫               |
| 7  | 10YR3/1 黒褐色砂質土 (土壌135)        | 103 | 2.5Y3/2 黒褐色砂礫               |
| 8  | 2.5YR3/2 黒褐色シルト質粗砂 (溝135)     | 104 | 2.5Y4/2 暗灰黄色砂礫              |
| 9  | 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 (溝135)         | 105 | 2.5Y3/2 黒褐色粗砂               |
| 10 | 2.5Y4/1 黄褐色粘質土 (溝135)         | 106 | 2.5Y3/2 黒褐色砂礫               |
| 11 | 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質土 (溝4)        | 107 | 2.5Y4/2 暗灰黄色粗砂              |
| 12 | 10YR4/4 褐色砂質土粗砂混じり (溝4)       | 108 | 10YR3/1 黒褐色粗砂               |
| 13 | 2.5Y4/1 黄灰色砂礫 (東洞院大道路面)       | 109 | 2.5Y4/2 暗灰黄色粗砂              |
| 14 | 10YR4/1 褐灰色砂礫 (東洞院大道路面)       | 110 | 2.5Y4/4 オリーブ褐色粗砂            |
| 15 | 10YR4/1 褐灰色砂礫 (東洞院大道路面)       | 111 | 10YR4/4 褐色砂礫                |
| 16 | 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘砂質土           | 112 | 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂            |
| 17 | 2.5Y3/1 黒褐色シルト質粗砂混じり          | 113 | 2.5Y4/1 黄灰色砂礫               |
| 18 | 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質土 (溝7)        | 114 | 2.5Y4/1 黄灰色砂礫               |
| 19 | 10YR6/4 にぶい黄褐色粘砂質土 (溝7)       | 115 | 2.5Y4/1 黄灰色粗砂               |
| 20 | 2.5Y3/2 黒褐色シルト                | 116 | 2.5Y3/1 黒褐色砂質土              |
| 21 | 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質土               | 117 | 2.5Y4/3 オリーブ褐色粗砂            |
| 22 | (井戸11) 別図あり                   | 118 | 2.5Y3/1 黒褐色粗砂               |
| 23 | 2.5Y5/4 黄褐色砂質土 (土壌23)         | 119 | 2.5Y4/2 暗灰黄色粗砂              |
| 24 | 2.5Y6/2 灰黄色砂質土 (土壌2)          | 120 | 2.5Y3/1 黒褐色砂質土粗砂混じり (土壌120) |
| 25 | 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質土 (土壌2)         | 121 | 2.5Y3/1 黒褐色砂質土 (土壌120)      |
| 26 | 2.5Y4/2 暗灰黄色砂礫 (土壌2)          | 122 | 5Y4/1 灰色砂礫                  |
| 27 | 2.5Y6/2 暗黄色シルト (土壌2)          | 123 | 5Y4/1 灰色砂礫                  |
| 28 | 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂礫シルト混じり (土壌2) | 124 | 10YR4/1 褐灰色砂礫               |
| 29 | 2.5Y3/2 黒褐色砂質土                | 125 | 5Y4/1 灰色砂礫                  |
| 30 | 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂礫混じり          | 126 | 2.5Y3/2 黒褐色粗砂               |
| 31 | 10YR4/2 灰黄褐色砂質土 (土壌31)        | 127 | 2.5Y3/2 黒褐色粗砂               |
| 32 | 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質土               | 128 | 2.5Y4/3 暗オリーブ褐色粗砂           |
| 33 | 2.5Y6/2 灰黄色砂質土                | 65  | 2.5Y3/1 黒褐色砂礫               |
| 34 | 2.5Y5/1 黄灰色砂質土                | 66  | 2.5Y4/2 暗灰黄色粗砂              |
| 35 | 2.5Y3/1 黒褐色砂質土 (土壌130)        | 67  | 2.5Y3/2 黒褐色砂質土              |
| 36 | 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土 (土壌130)       | 68  | 10YR3/1 黒褐色砂礫               |
| 37 | 2.5Y3/1 黒褐色砂質土 (土壌130)        | 69  | 2.5Y3/2 黒褐色粗砂               |
| 38 | 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘砂質土 (土壌130)   | 70  | 2.5Y4/1 黄灰色砂礫               |
| 39 | 2.5Y3/1 黒褐色粘砂質土 (土壌130)       | 71  | 2.5Y4/2 暗灰黄色粗砂              |
| 40 | 2.5Y4/1 黄灰色砂質土                | 72  | 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂礫           |
| 41 | 2.5Y3/2 黒褐色砂質土 (土壌63)         | 73  | 2.5Y3/1 黒褐色砂礫シルト混じり         |
| 42 | 2.5Y5/1 黄灰色砂質土 (土壌63)         | 74  | 7.5YR4/4 褐色砂礫               |
| 43 | 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質土 (土壌63)        | 75  | 10YR4/6 褐色砂礫                |
| 44 | 2.5Y3/1 黒褐色砂質土 (土壌65)         | 76  | 2.5Y4/2 暗灰黄色砂礫 (土壌216)      |
| 45 | 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土 (土壌65)        | 77  | 2.5Y4/2 暗灰黄色砂礫 (土壌216)      |
| 46 | 2.5Y4/1 黄灰色砂質土 (土壌76)         | 78  | 5Y5/1 灰色砂質土 (土壌150)         |
| 47 | 10YR4/4 褐色粘土 (土壌132)          | 79  | 2.5Y4/1 黄灰色シルト質粗砂 (土壌150)   |
| 48 | 2.5Y5/1 黄灰色粘質土                | 80  | 2.5Y4/1 黄灰色粗砂 (土壌150)       |
| 49 | 2.5Y4/2 暗灰黄色粗砂                | 81  | 5Y4/1 灰色粗砂                  |
| 50 | 2.5Y2/1 黒褐色砂礫                 | 82  | 10YR4/1 褐灰色砂礫               |
| 51 | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土 (土壌73)      | 83  | 2.5Y3/1 黒褐色砂礫               |
| 52 | 2.5Y3/2 黒褐色砂質土 (土壌73)         | 84  | 2.5Y4/1 灰黄色粗砂               |
| 53 | 2.5Y3/2 黒褐色砂質土 (土壌84)         | 85  | 5Y4/1 灰色砂礫                  |
| 54 | 2.5Y4/1 黄灰色粗砂 (土壌85)          | 86  | 5Y4/1 灰色粗砂                  |
| 55 | 2.5Y4/1 黄灰色砂質土                | 87  | 5Y4/1 灰色粗砂 (土壌145)          |
| 56 | 2.5Y4/1 黄灰色砂礫                 | 88  | 2.5Y4/1 黄灰色砂質土 (土壌145)      |
| 57 | 2.5Y3/1 黒褐色粗砂                 | 89  | 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質土             |
| 58 | 2.5Y4/2 暗灰黄色粗砂 (土壌90)         | 90  | 5Y4/1 灰色粗砂                  |
| 59 | 2.5Y3/1 黒褐色粗砂                 | 91  | 5Y4/1 灰色粗砂                  |
| 60 | 2.5Y3/1 黒褐色粗砂                 | 92  | 2.5Y3/2 黒褐色砂礫               |
| 61 | 2.5Y4/1 黄灰色粗砂                 | 93  | 5Y4/1 灰色粗砂                  |
| 62 | 2.5Y4/2 暗灰黄色粗砂                | 94  | 10YR4/1 褐灰色砂礫               |
| 63 | 2.5Y3/1 黒褐色粗砂 (土壌100)         | 95  | 2.5Y3/1 黒褐色粗砂               |
| 64 | 2.5Y4/1 黄灰色粗砂                 | 96  | 2.5Y4/4 オリーブ褐色粗砂            |

図6 A区北壁断面図N (1:100)

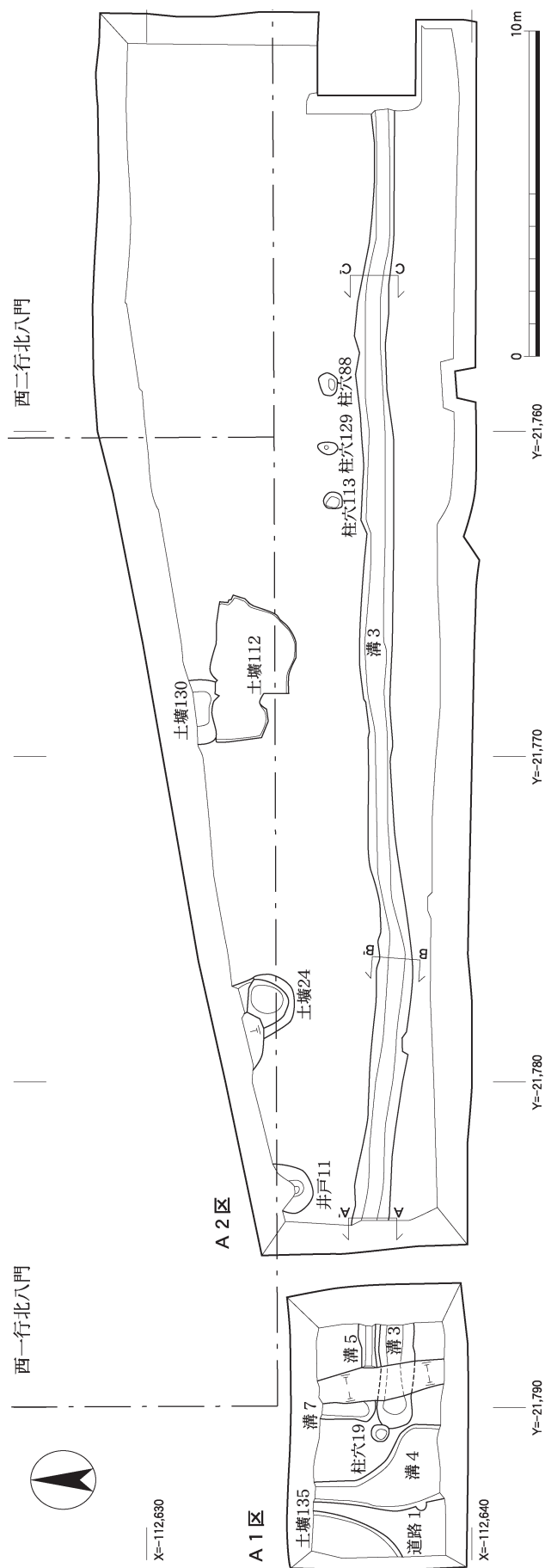


図7 A区平面図 [平安時代末期～鎌倉時代] 1 (1 :

たと思われる。道路1（東洞院大路）に接していること、東洞院大路東築地の推定ラインより約2m西に位置することから、東洞院大路の東側溝と考えられる。

溝5（図7）A1区の東端で、溝3のすぐ北側で検出した東西方向の溝である。東西を攪乱によって破壊されているため規模は不明である。なお、A2区では検出されていないことから、途中で溝3に合流する可能性も考えられる。検出した長さは1.5m、幅は0.5mである。深さは0.3m、埋土はにぶい黄褐色粘質土である。土師器の皿、瓦などが出土している。

溝7（図7）溝3の西端の北側から北に延びる溝である。検出した長さは2.5m、幅は東側を攪乱によって破壊されているが現存幅は0.65mである。深さは0.2m、埋土は2層に分れ上層はにぶい黄褐色砂質土、下層はにぶい黄褐色粘砂質土である。土師器の皿、須恵器の杯などが出土している。東洞院大路東築地の推定ラインと重なり、東洞院大路東築地の内溝と考えられる。

井戸11（図7・9、図版3）A2区の北西隅で検出した井戸である。南半部のみであるが、一辺が約0.6mの方形横棧縦板組みで、木枠が内側に倒れ込んで埋没していた。掘形の東西幅は約1.5mである。深さは検出面から約1.2mあり、底には径約0.45mの曲物が残存していた。埋土は、木枠崩壊後の堆積土（図9-1～7）、掘形の堆積土（図9-8～10）、木枠内の堆積土（図9-11・12）、曲物内の堆積土（図9-13）、曲物掘形の堆積土（図9-14）に分れる。土師器

の皿、常滑焼の甕、瓦器の火鉢などが出土している。

土壌 24 (図7・11) A2区の北西部で検出した土壌である。北側は調査区外に伸びるが、径約1.2 mの円形で、深さは0.8 mである。埋土は上層は暗灰黄色の砂質土、以下、黒褐色砂質土、暗オリーブ褐色砂礫、オリーブ黒色シルト質粗砂の順に堆積している。土師器の皿などが出土している。

柱穴 88 (図7) A2区の東辺で検出した柱穴である。東西約0.6 m、南北約0.7 mの隅丸方形で、深さは0.4 mである。東播系陶器の挿鉢が出土している。

土壌 112 (図7・11、図版3) A2区の中央部で検出した土壌で、多量の土師器皿の完形品が出土し、一部重なった状態で検出した。東西約4.2 m、南北約2.4 mの不整形形で、深さは約0.3 mである。埋土は上層が黒褐色砂質土、下層が黄灰色砂質土である。遺物は、整理箱18箱以上出土したが、ほとんど土師器の皿である。他に瓦器の椀・鉢などが出土している。

柱穴 113 (図7) A2区の中央部で検出した柱穴である。径約0.55 mの不整形円形で、深さ約0.1 mである。埋土は暗灰黄色粘質土である。

柱穴 129 (図7) A2区の中央部で検出した柱穴である。南北が上層の遺構で破壊されているが、径約0.4 mの円形になると思われる。深さは約0.2 m、埋土はにぶい黄褐色粘質土である。柱穴 88、柱穴 113 と東西に約1.8 mの間隔で並ぶ。

土壌 130 (図7) A2区の中央部の北端で検出された土壌である。南半部のみ

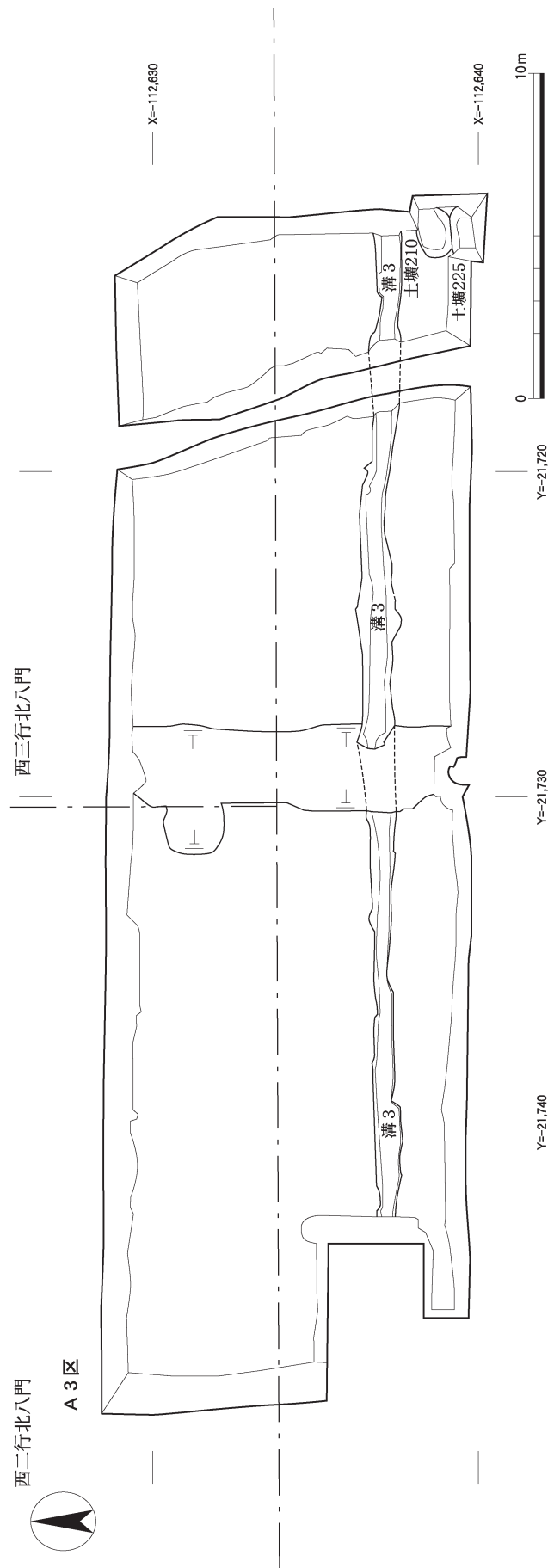
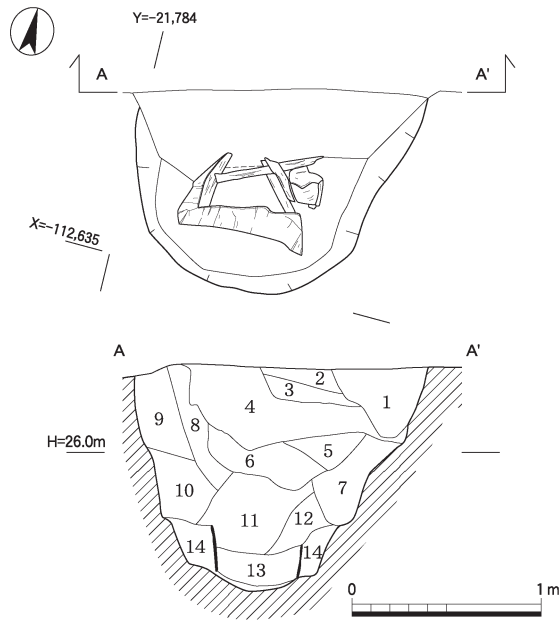


図7 A区平面図 [平安時代末期～鎌倉時代] 2 (1 : 200)



- |                      |                    |
|----------------------|--------------------|
| 1 2.5Y6/1 灰白色 砂礫     | 8 2.5Y3/1 黒褐色 粗砂   |
| 2 2.5Y4/1 黄灰色 砂質土    | 9 10YR3/1 黒褐色 粗砂   |
| 3 10YR3/1 黒褐色 砂質土    | 10 10YR3/2 黒褐色 粗砂  |
| 4 10YR5/4 にぶい黄褐色 砂質土 | 11 2.5Y3/2 黒褐色 シルト |
| 5 2.5Y5/2 暗灰黄色 砂質土   | 12 2.5Y3/1 黒褐色 砂礫  |
| 6 2.5Y3/2 黒褐色 粗砂     | 13 2.5Y4/1 黄灰色 粗砂  |
| 7 5Y3/2 オリーブ黒色 砂礫    | 14 2.5Y3/2 黒褐色 粗砂  |

図9 A区井戸11実測図(1:40)

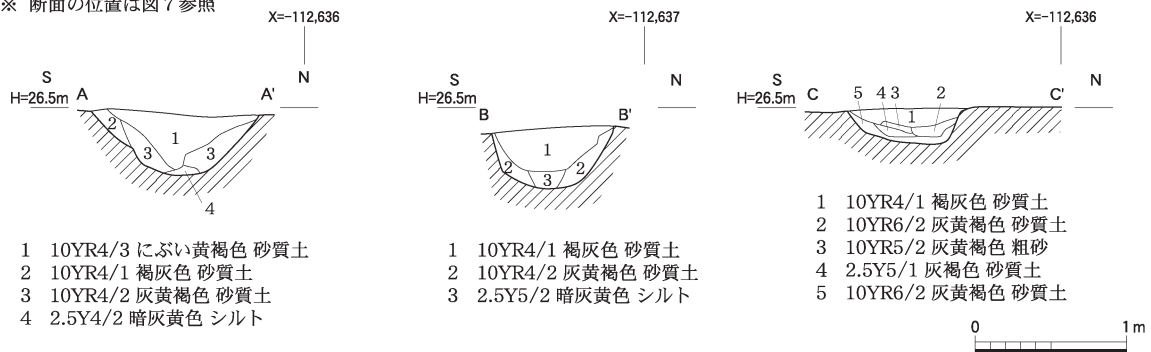
土が中心となる。遺物は、整理箱16箱以上出土したが、ほとんど土師器の皿である。

土壌225(図8) A3区の南東隅で検出した土壌である。規模は南北約1.0m以上、東西約1.7m以上で、南側は調査区外となるため、規模は不明である。深さは約0.5mで、埋土は黒褐色シルトが中心である。遺物は土師器の皿、瓦器、焼締陶器、瓦などが出土している。埋土の土壌分析をした結果、稲の葉・茎を検出した。

### 3) 室町時代の遺構(図12~18、図版1・2・4)

柱穴16(図12・17) A2区の西側で検出した柱穴である。径0.7mの方形で、深さは約0.1mで、

※ 断面の位置は図7参照



- |                      |
|----------------------|
| 1 10YR4/3 にぶい黄褐色 砂質土 |
| 2 10YR4/1 褐灰色 砂質土    |
| 3 10YR4/2 灰黄褐色 砂質土   |
| 4 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト   |

- |                    |
|--------------------|
| 1 10YR4/1 褐灰色 砂質土  |
| 2 10YR4/2 灰黄褐色 砂質土 |
| 3 2.5Y5/2 暗灰黄色 シルト |

- |                    |
|--------------------|
| 1 10YR4/1 褐灰色 砂質土  |
| 2 10YR6/2 灰黄褐色 砂質土 |
| 3 10YR5/2 灰黄褐色 粗砂  |
| 4 2.5Y5/1 灰褐色 砂質土  |
| 5 10YR6/2 灰黄褐色 砂質土 |

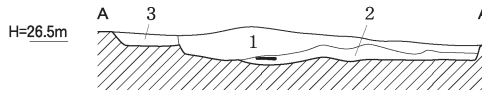
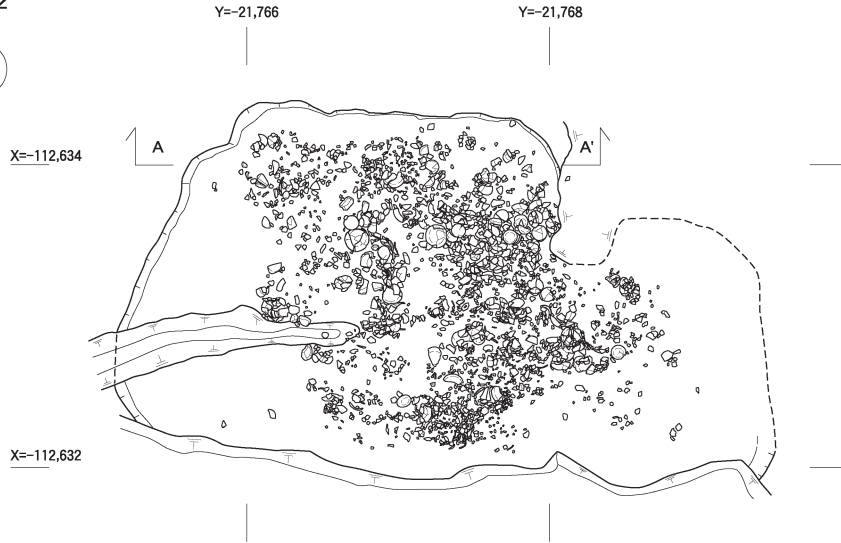
図10 A区溝3断面図(1:50)

の検出で東西一辺約2.0m、南北の現存長約1.0mである。深さは約0.7mで、埋土は黒褐色砂質土を中心とする。土師器、瓦器、輸入青磁、瓦などが出土している。

土壌135(図7) A1区の東端、東洞院大路の路面上で検出した土壌である。北東から南西にのびる東肩のみの検出で、形態・規模とも不明である。深さは0.4mで、埋土は上層が黒褐色砂質土、下層は黄褐色粘質土を中心とする。遺物は鎌倉時代を中心とし、土師器の皿、輸入青磁、瓦などが出土している。

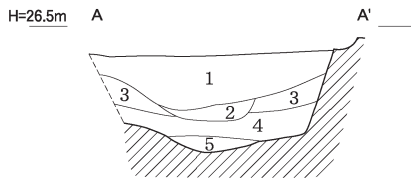
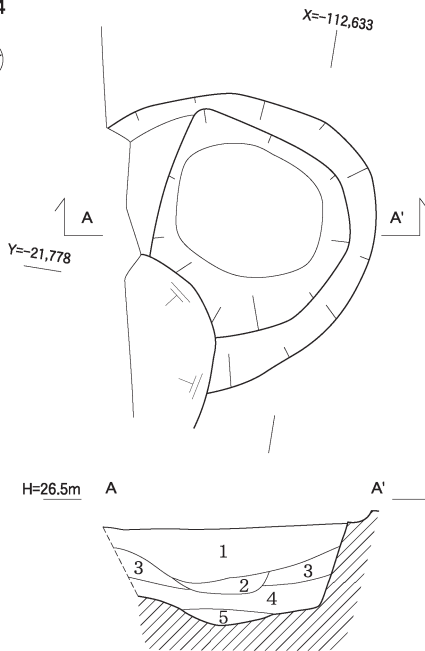
土壌210(図8・11、図版3) A3区の南東隅で検出した土壌で、多量の土師器皿の完形品が、重ねられた状態で出土している。東側は調査区外に延びており、南側は室町時代の溝(溝71)に破壊されているが、現存長南北約1.1mで、深さは0.5mである。埋土は黒褐色砂質土

土壌112



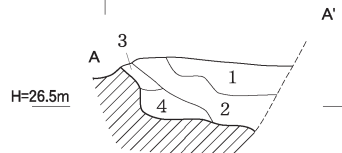
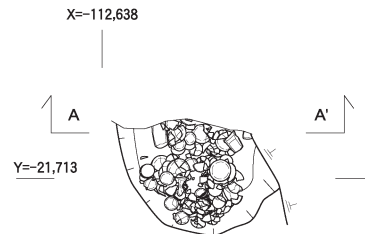
- 1 10YR3/1 黒褐色 砂質土
- 2 2.5Y4/1 黄灰色 砂質土
- 3 10YR5/3 にぶい黄褐色 砂質土

土壌24



- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質土
- 2 2.5Y3/2 黒褐色 砂質土
- 3 2.5Y3/2 黒褐色 粗砂
- 4 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 砂礫
- 5 5Y3/2 オリーブ黒色 シルト質粗砂

土壌210



- 1 2.5Y3/2 黒褐色 砂質土
- 2 10YR3/2 黒褐色 砂質土
- 3 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 砂質土
- 4 2.5Y3/2 黒褐色 極細砂



図 11 A区土壌 24・112・210 実測図 (1 : 50)

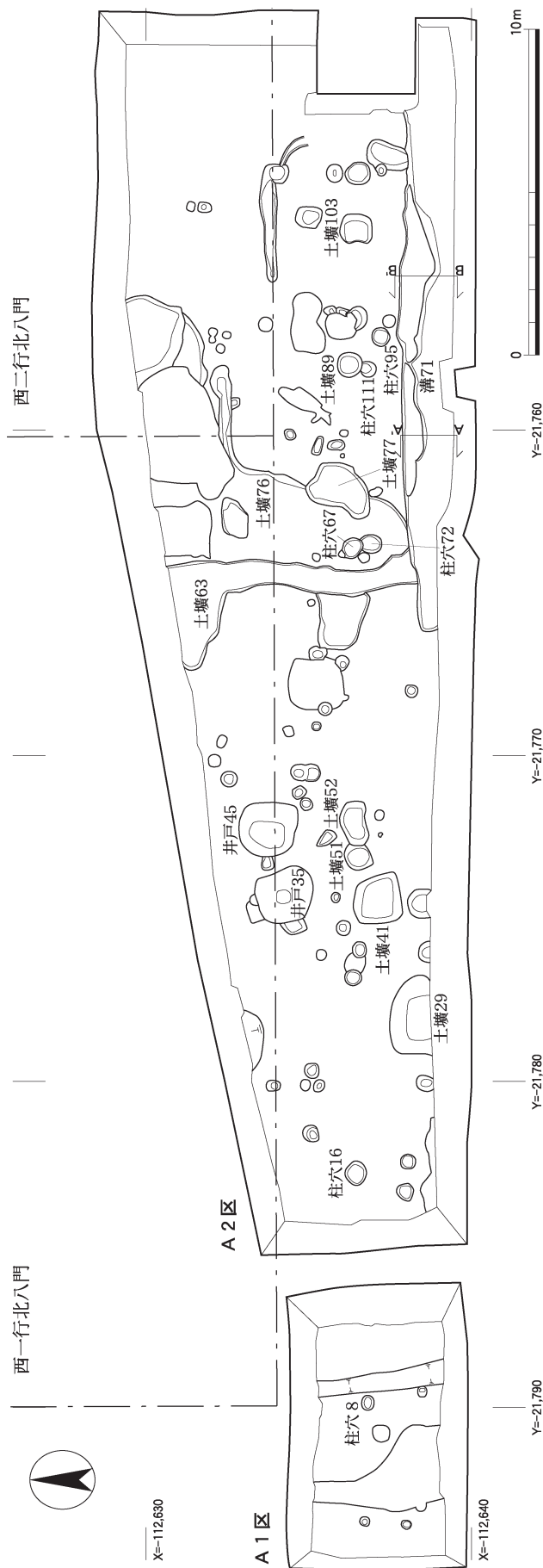


図12 A区平面図 [室町時代] 1 (1 : 200)

埋土は黒褐色砂質土である。土師器、瓦、牛または馬歯が出土している。

井戸 35 (図 12・14、図版 4) A 2 区の西部で検出した井戸である。一部攪乱を受けているが、径約 1.7 m の不整円形の掘形をもち、内法約 0.7 m の円形の桶を井戸枠とする。底部には一辺 0.3 m、高さ 0.3 m の木枠が組まれていた。深さは約 1.3 m で、井戸枠内の埋土は黒褐色シルトである。土師器の皿、瓦器の羽釜、輸入青磁の皿、施釉陶器の水注などが出土している。

井戸 45 (図 12・15、図版 4) 井戸 35 の西側で検出した井戸である。掘形の直径約 1.8 m、内法約 0.7 m、深さ約 1.25 m の円形石組井戸で、底に一辺 0.55 m、高さ 0.1 m の木枠が組まれていた。使用されている石は 0.2 ~ 0.3 m 大のもので、小口を内側に向けて積上げられている。井戸枠内の埋土は黒褐色シルトである。土師器の皿、瓦器の羽釜、施釉陶器の椀、焼締陶器の播鉢などが出土している。

土壇 41 (図 12) A 2 区の西側の南寄り検出した土壇である。一辺約 1.5 m の方形で、深さは約 0.1 m で、埋土は暗オリーブ褐色砂質土を中心とする。土師器、瓦などが出土している。

土壇 51 (図 12・17) 土壇 41 の北東で検出した土壇である。径約 0.8 m の円形で、深さは約 0.35 m で、埋土は褐灰色砂質土を中心とする。土師器、瓦などが出土している。

土壇 63 (図 12) A 2 区の中央部で検出した溝状の不整形な土壇である。北側は調査区外にのび、南側は溝 71 に破壊さ



れている。幅は北部で約 3.5 m、南部で約 0.7 m、深さは調査区北壁部で約 0.45 m である。埋土は黒褐色砂質土、黄灰色砂質土、暗灰黄色砂質土の順に堆積している。土師器、瓦器、輸入青磁、施釉陶器などが出土している。

柱穴 67 (図 12・17) A 2 区の中央部で検出した柱穴である。径 0.6 m の円形で、深さは 0.2 m である。埋土は上層がオリーブ褐色砂質土、下層は黒褐色砂質土である。土師器、瓦器、瓦などが出土している。

溝 71 (図 12・13・16) 調査区の南端で検出した若干蛇行する東西方向の溝で、A 2 区の中央から始まり、A 3 区の東端まで続いている。検出した長さは、途中攪乱によって切断されているが、約 53 m である。幅は南肩が調査区外になるために不明であるが、現存幅 0.5 ~ 2.0 m で、深さは 0.3 ~ 0.5 m である。断面は U 字形で、埋土は黒褐色砂質土を中心とする。土師器の皿、瓦器の鍋、輸入青磁の椀、輸入白磁の椀、施釉陶器の皿などが出土している。八条大路の北築地の推定ラインより約 4.5 ~ 5.0 m 南で検出しており、平安時代末期から鎌倉時代の八条大路の北側溝 (溝 3) よりさらに南側に位置し、室町時代の八条大路の北側溝と考えられる。

柱穴 72 (図 12・17) A 2 区の中央部で検出した柱穴である。北部を柱穴 67 に破壊されているため南北長は不明であるが、東西 0.6 m の楕円形である。深さは 0.2 m で、埋土は上層がオリーブ褐色砂質土、下層は黒褐色砂質土である。

土壇 76 (図 12) A 2 区の中央部で検

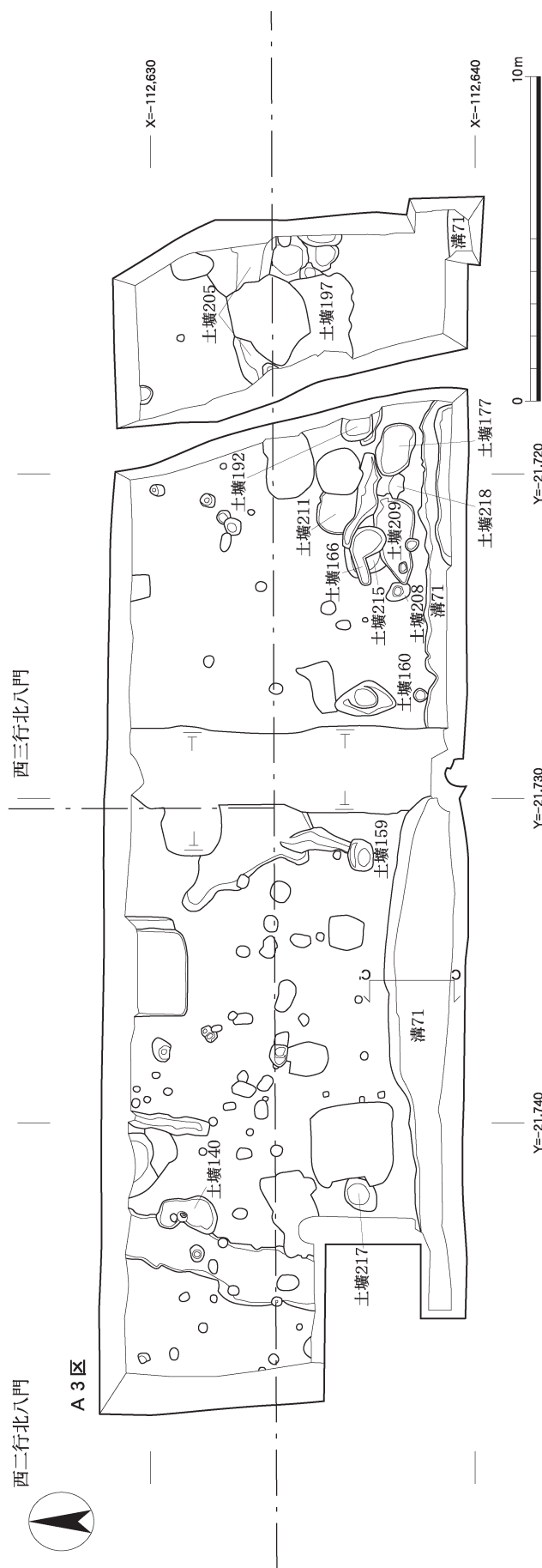


図 13 A 区平面図 [室町時代] 2 (1 : 200)

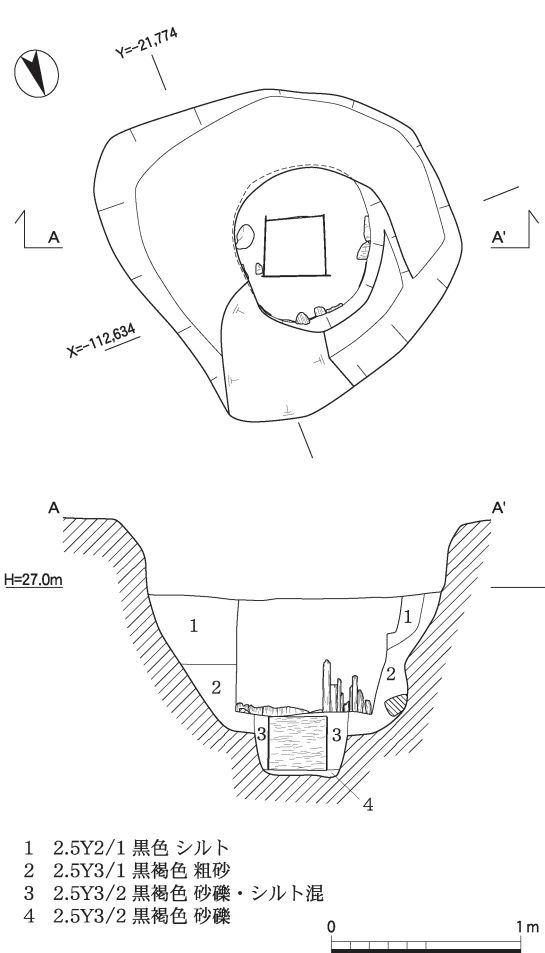


図 14 A区井戸 35 実測図 (1 : 40)

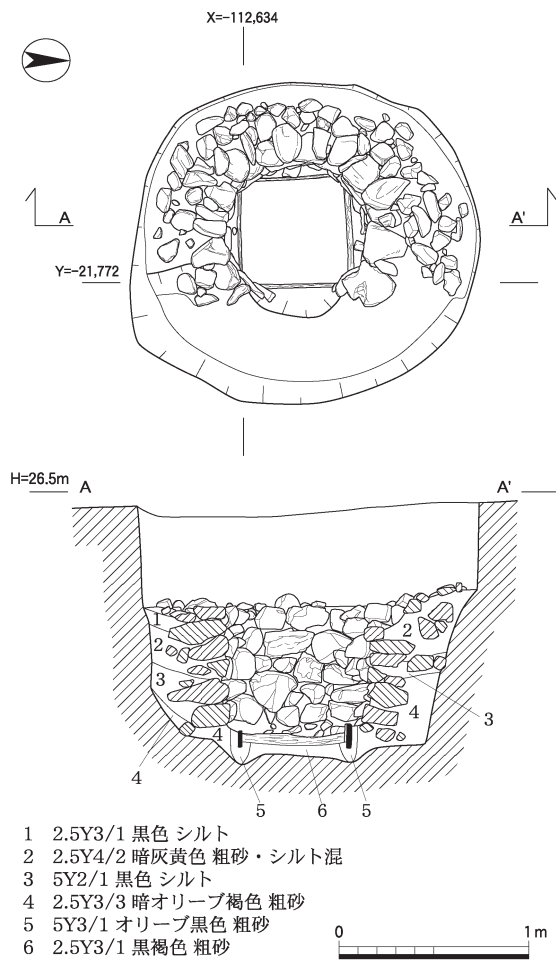


図 15 A区井戸 45 実測図 (1 : 40)

※ 断面の位置は図12・13参照

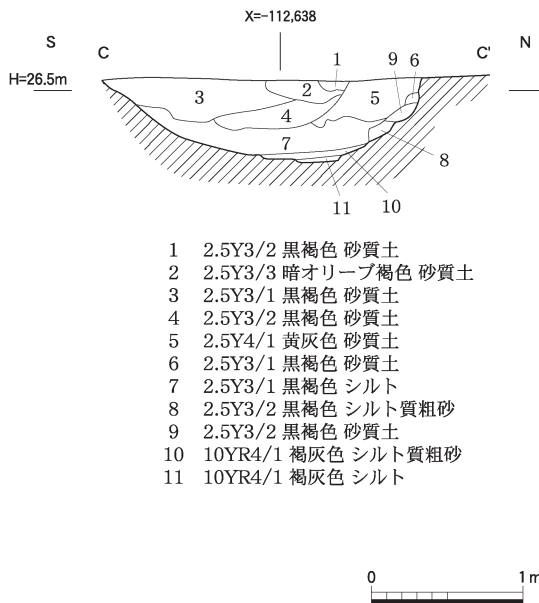
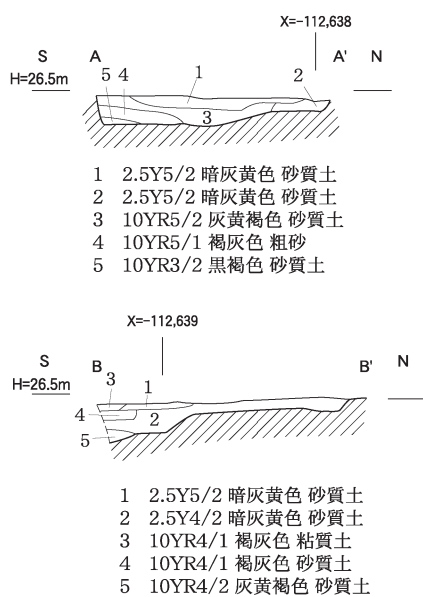
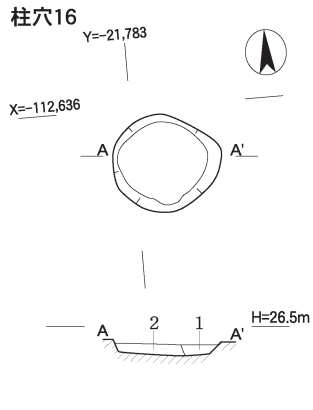
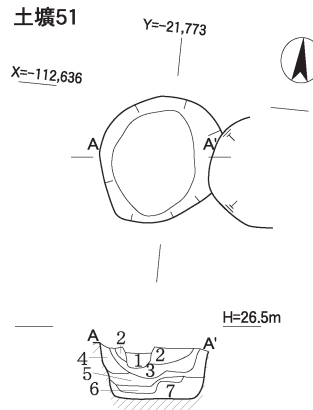


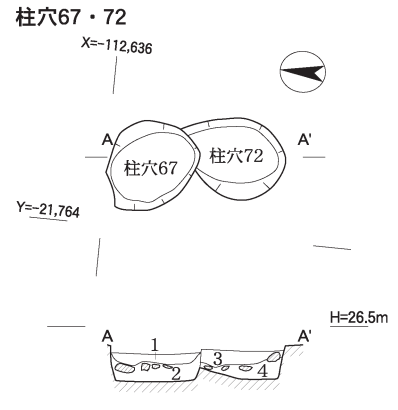
図 16 A区溝 71 断面図 (1 : 50)



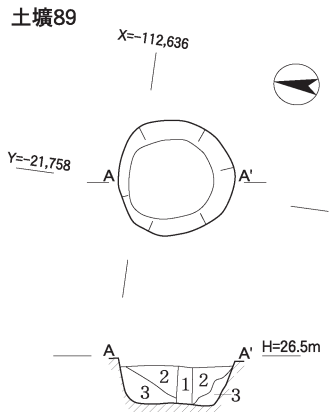
- 1 10YR4/1 褐灰色 砂質土
- 2 2.5Y3/2 黒褐色 砂質土



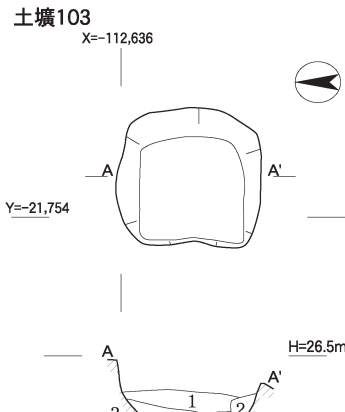
- 1 2.5Y3/2 黒褐色 砂質土
- 2 10YR4/2 褐色 砂質土
- 3 10YR4/1 褐灰色 砂質土
- 4 7.5YR4/1 褐灰色 砂質土
- 5 10YR4/1 褐灰色 粗砂
- 6 10YR4/2 灰黄褐色 砂質土
- 7 10YR3/1 黒褐色 粗砂



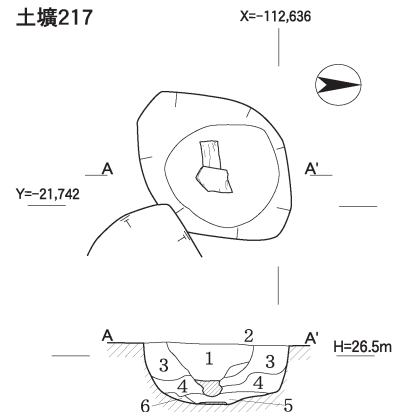
- 1 2.5Y4/3 オリーブ褐色 砂質土 (柱穴67)
- 2 10YR3/1 黒褐色 砂質土 (柱穴67)
- 3 2.5Y4/3 オリーブ褐色 砂質土 (柱穴72)
- 4 10YR3/1 黒褐色 砂質土 (柱穴72)



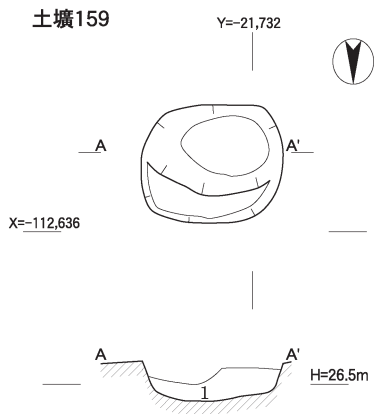
- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質土
- 2 2.5Y5/2 暗灰黄色 砂質土
- 3 2.5Y4/1 黄灰色 砂質土



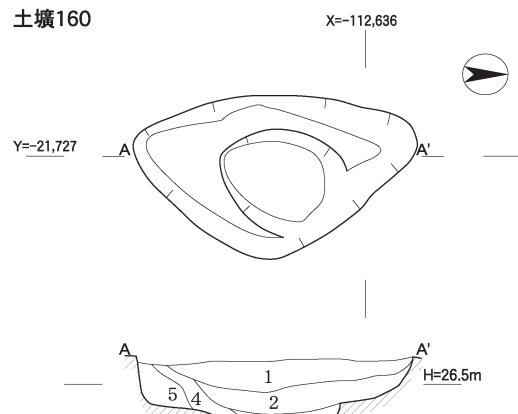
- 1 10YR4/2 灰黄褐色 砂質土
- 2 10YR5/3 にぶい黄褐色 砂質土
- 3 10YR5/2 灰黄褐色 砂質土



- 1 10YR4/1 褐灰色 砂質土
- 2 2.5Y3/2 黒褐色 シルト
- 3 2.5Y4/1 黄灰色 砂質土
- 4 2.5Y4/1 黄灰色 粘砂質土
- 5 2.5Y3/1 黒褐色 粘質土
- 6 2.5Y4/1 黄灰色 細砂



- 1 2.5Y4/1 黄灰色 シルト



- 1 10YR4/2 灰黄褐色 砂質土
- 2 2.5Y3/2 黒褐色 粘砂質土
- 3 2.5Y3/2 黒褐色 シルト質粗砂
- 4 2.5Y3/2 黒褐色 粗砂
- 5 2.5Y3/1 黒褐色 シルト質粗砂



図 17 A区柱穴 16・67・72、土壌 51・89・103・159・160・217 実測図 (1 : 50)

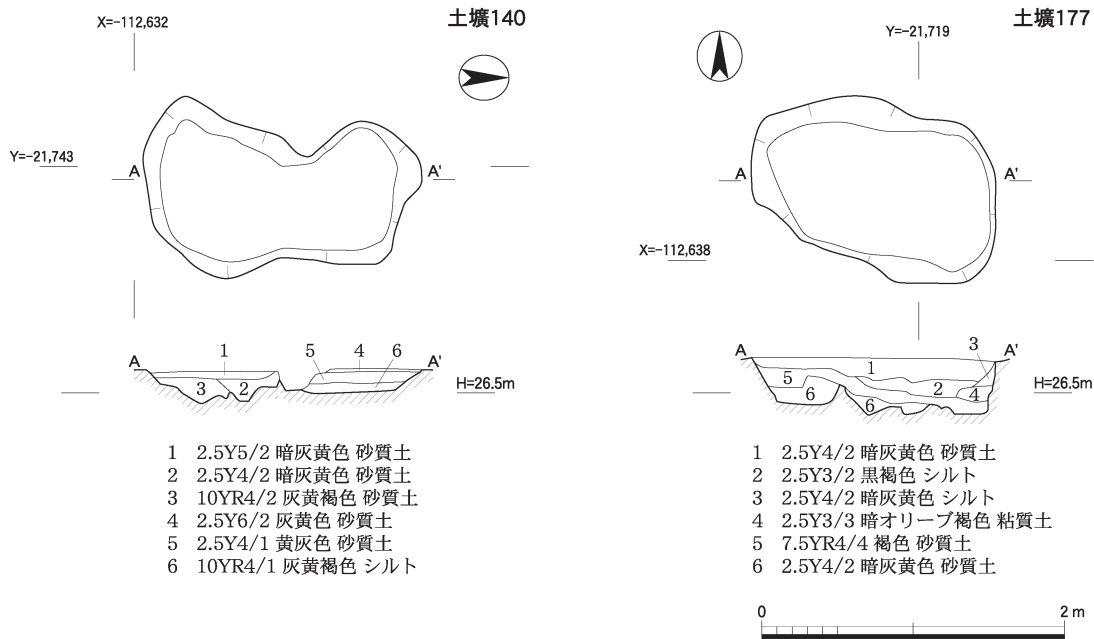


図 18 A区土壌 140・177 実測図 (1 : 50)

出した南北に長い溝状の土壌である。西側を土壌 63 に、南側を溝 71 に破壊されている。東西幅約 1.5 ~ 3.0 m、南北の現存長は 7.5 m である。埋土は褐色粘土を中心とする。土師器、瓦器、輸入青磁、焼締陶器などが出土している。

土壌 89 (図 12・17) A 2 区の東側で検出した土壌である。径約 0.8 m の円形で、深さは約 0.25 m で、埋土は暗灰黄色砂質土を中心とする。

土壌 103 (図 12・17) A 2 区の東側で検出した土壌である。一辺約 0.9 m の隅丸方形で、深さは約 0.3 m で、埋土はにぶい黄褐色砂質土を中心とする。土師器、瓦などが出土している。

土壌 140 (図 13・18) A 3 区の北西隅で検出した土壌である。中央部が凹んだ瓢形で、南北長約 1.8 m ・東西幅 1.1 m で、深さは約 0.2 m で、埋土は暗灰黄色砂質土を中心とする。土師器、須恵器の杯が出土している。

土壌 159 (図 13・17) A 3 区の中央部で検出した土壌である。南北幅 0.8 m、東西幅 0.9 m の隅丸の矩形で、深さは 0.25 m、埋土は黄灰色シルトである。

土壌 160 (図 13・17) A 3 区の東側で検出した土壌である。南北長約 1.9 m、東西長約 1.1 m の不整楕円形で、深さは約 0.5 m で、埋土は黒褐色シルト質粗砂を中心とする。土師器、輸入白磁、瓦などが出土している。

土壌 177 (図 13・18) A 3 区の北西隅で検出した土壌である。中央部が凹んだ瓢形で、南北長約 1.8 m、東西幅 1.1 m で、深さは約 0.2 m で、埋土は暗灰黄色砂質土を中心とする。土師器、瓦器、輸入青磁・白磁、瓦などが出土している。

土壌 215 (図 13) A 3 区の東側で検出した土壌である。径約 1.5 m の不整形円形で、深さは約 0.35 m、埋土は黒褐色砂質土を中心とする。土師器が出土している。

土壌 217 (図 13・17) A 3 区の南西隅で検出した土壌である。一辺約 0.9 m の不整形方形で、深

さは約0.4 mで、埋土は黄灰色砂質土を中心とする。土壙のほぼ中央に、平らな面を上にする石が据えられている。底部からは、長さ0.3 m・幅0.1 m・厚さ0.02 mの板材が出土した。土師器、瓦などが出土している。

なお、西から柱穴16→土壙51→柱穴67→土壙89→土壙103→土壙217→土壙159→土壙160→土壙166が東西の直線上に5 m・10 m間隔に並ぶ。この柱穴・土壙列は、八条大路の北築地推定線より南へ約3.2 mの地点で、平安時代の八条大路の北側溝の北肩のラインと重なっている。また、すぐ南側には室町時代の八条大路の北側溝（溝71）があることから、室町時代の築地に相当する施設になる可能性がある。

### （3）B区の遺構

#### 1）基本層序（図19）

基本層序は、表土下約0.5 mまでが現代の盛土層、その下に近現代の遺物を含む黒褐色粘砂質土層、東端で江戸時代の耕作土である暗オリーブ色シルト層が堆積している。以下は、鴨川の洪水によって運ばれてきたと思われる砂礫の堆積層である。砂礫から出土した遺物は、平安時代から室町時代にかけての遺物であるが、角がとれてかなり磨耗している。また、層の上下に係わりなく新旧の遺物が混在している。

#### 2）遺構（図20、図版4）

検出した遺構は、すべて近現代の遺構で、溝・土壙・井戸などがある。明治から大正にかけての磁器、陶器、ガラス製品などが出土している。

### （4）C区の遺構

#### 1）基本層序（図21・22）

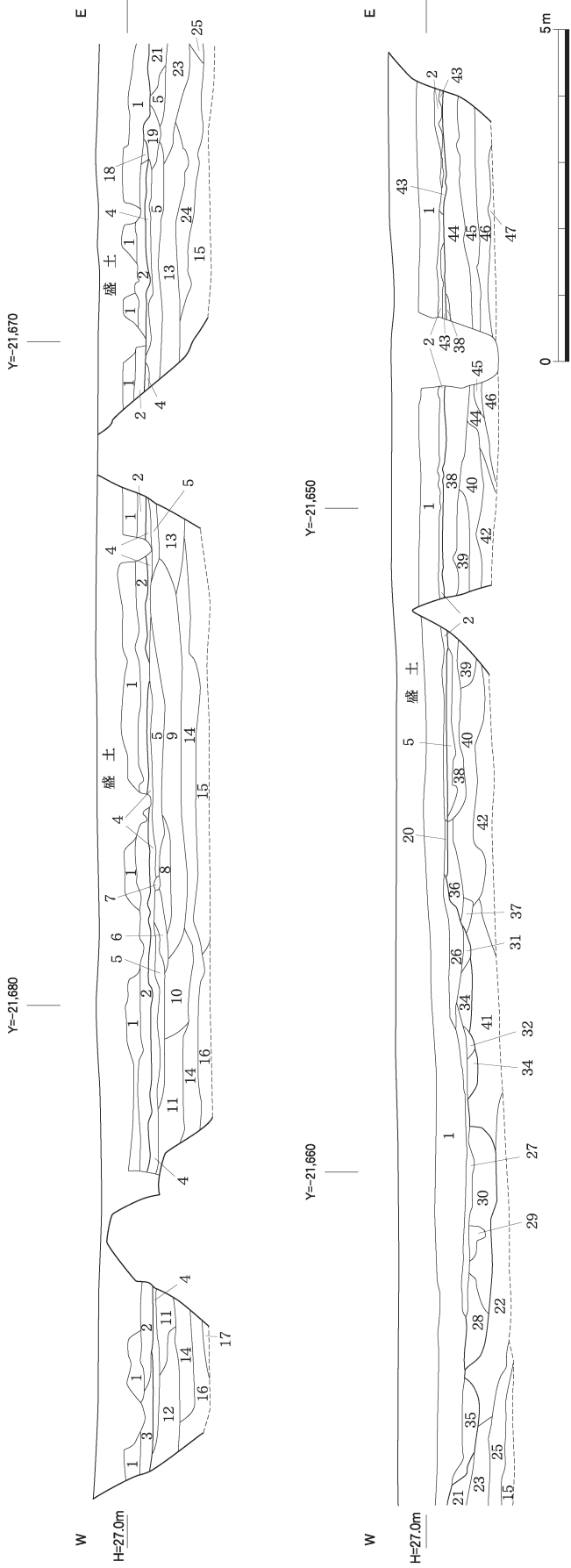
基本層序は、C1区では地表下約0.5 mまでが現代の盛土層で、その下に江戸時代の耕作土である黄灰色砂質土層、にぶい黄褐色砂質土層（床土）、以下砂礫層となり、鴨川の氾濫堆積層だとと思われる。氾濫堆積層の上から江戸時代の遺構が形成される。

C2区では、地表下約0.5 mまでが現代の盛土層で、その下に江戸時代の耕作土である黒褐色シルト質細砂層、以下は鴨川の氾濫堆積層となる。氾濫堆積層の上から遺構が形成される。

C3区では、地表下約0.8 mまで現代の盛土層で、その下に近現代層の黒色砂質土層、以下は鴨川の氾濫堆積層となる。氾濫堆積層の上から遺構が形成される。

#### 2）江戸時代の遺構（図23～28、図版5～7）

井戸2（図23） C1区の北東部で検出した井戸である。西側を攪乱溝で破壊されているが径1.25



- |    |                    |    |                     |
|----|--------------------|----|---------------------|
| 1  | 2.5Y3/1 黒褐色 粘砂質土   | 33 | 5Y4/3 暗オリーブ色 粗砂     |
| 2  | 5Y3/1 オリーブ黒色 シルト   | 34 | 5Y6/2 灰オリーブ色 粗砂     |
| 3  | 2.5Y3/1 黒褐色 粘質土    | 35 | 2.5Y2/1 黒色 シルト      |
| 4  | 2.5Y3/1 黒褐色 粗砂     | 36 | 5Y3/2 オリーブ黒色 砂礫     |
| 5  | 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂礫    | 37 | 2.5Y3/2 黒褐色 粗砂      |
| 6  | 10YR4/4 褐色 砂礫      | 38 | 5Y4/2 灰オリーブ色 細砂     |
| 7  | 2.5Y3/1 黒褐色 粗砂     | 39 | 2.5Y3/1 黒褐色 粗砂      |
| 8  | 2.5Y4/3 オリーブ褐色 砂礫  | 40 | 2.5Y4/3 オリーブ褐色 細砂   |
| 9  | 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 砂礫 | 41 | 7.5Y3/2 オリーブ黒色 粗砂   |
| 10 | 5Y3/2 オリーブ黒色 砂礫    | 42 | 2.5Y4/2 暗灰黄色 粗砂     |
| 11 | 5Y4/1 灰色 砂礫        | 43 | 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 シルト |
| 12 | 2.5Y4/1 黄灰色 砂礫     | 44 | 2.5Y4/1 黄灰色 シルト     |
| 13 | 2.5Y4/4 オリーブ褐色 砂礫  | 45 | 10YR 5/2 黄褐色 砂礫     |
| 14 | 2.5Y5/6 黄褐色 粗砂     | 46 | 10YR5/4 にぶい黄褐色 砂礫   |
| 15 | 5Y2/2 オリーブ黒色 砂礫    | 47 | 5YR4/6 赤褐色 砂礫       |
| 16 | 10YR5/6 黄褐色 砂礫     |    |                     |
| 17 | 7.5YR4/4 褐色 砂礫     |    |                     |
| 18 | 5Y4/1 灰色 シルト       |    |                     |
| 19 | 5Y4/1 灰色 砂礫        |    |                     |
| 20 | 5Y3/1 オリーブ黒色 シルト   |    |                     |
| 21 | 5Y3/2 オリーブ黒色 砂礫    |    |                     |
| 22 | 5Y2/2 オリーブ黒色 砂礫    |    |                     |
| 23 | 5Y4/3 暗オリーブ色 粗砂    |    |                     |
| 24 | 2.5Y4/3 オリーブ褐色 粗砂  |    |                     |
| 25 | 2.5Y4/3 オリーブ褐色 砂礫  |    |                     |
| 26 | 5Y2/1 黒色 シルト       |    |                     |
| 27 | 2.5Y3/1 黒褐色 シルト    |    |                     |
| 28 | 5Y2/2 オリーブ黒色 シルト   |    |                     |
| 29 | 5Y3/1 オリーブ黒色 シルト   |    |                     |
| 30 | 5Y4/1 灰色 砂礫        |    |                     |
| 31 | 5Y2/1 黒色 シルト       |    |                     |
| 32 | 5Y3/1 オリーブ黒色 シルト   |    |                     |

図 19 B 区北壁断面図 (1 : 100)

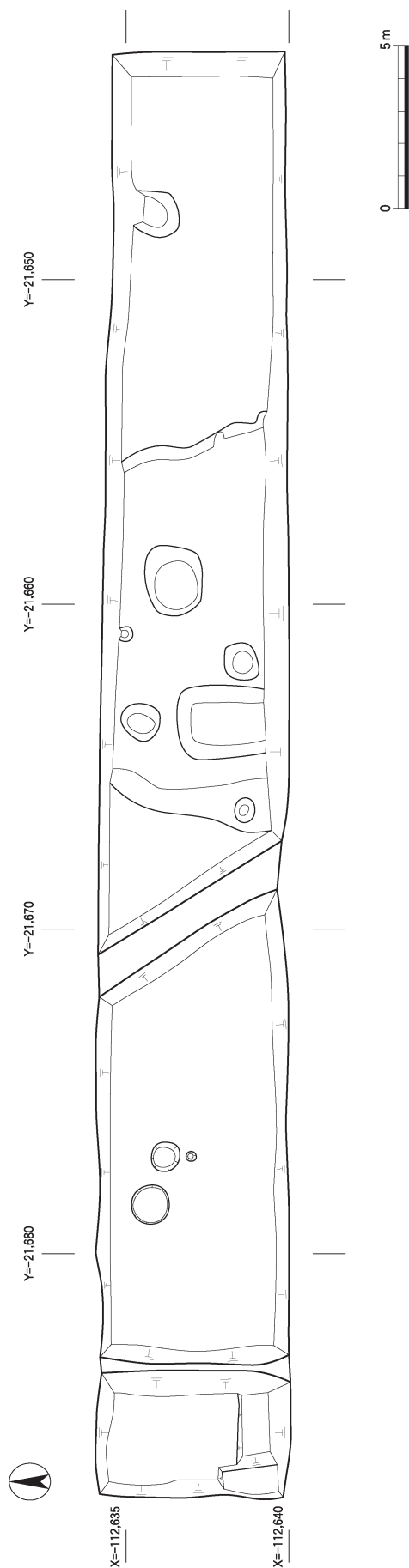


図 20 B区平面図 (1 : 200)

mの円形で、深さは0.5 m以上である。井戸枠用の瓦を用いて井筒としており、その内径は0.8 mである。埋土は黒褐色砂質土である。

土壙3 (図 23・24) C 1 区の東部で検出した土壙である。東側を攪乱溝で破壊されているが南北3.9 m、東西4.5 m以上の不整形で、深さは0.45 mである。断面は船底形を呈し、埋土は黒褐色系の砂質土が中心で、炭化物を多く含む。土師器の皿・火鉢、京・信楽系陶器の皿・椀、瀬戸の鉄釉陶器銭囊、肥前系磁器の椀・皿・壺、他にトチン、サヤ鉢などが出土している。廃棄土壙と考えられる。

土壙10 (図 23・25、図版5) C 1 区の中央部で検出した土壙である。南北3.55 m、東西1.45 mの隅丸の矩形を呈する。南北に2基の桶 (土壙11・13) を埋納するための土壙である。深さは0.35 mで、埋土は大きく黒褐色シルト (上層) と黒褐色シルト質粗砂 (下層) に分れる。肥前系磁器の椀・皿・仏飯器、京・信楽系陶器の椀などが出土している。

土壙11 (図 23・25、図版5) 土壙10内の北側に据えられた円形の桶である。径約1.0 mの円形で、深さは0.35 mである。埋土は上層が黒褐色シルト、下層が褐色粗砂である。また、桶の底板の下部に黄灰色粘土が約1 cm敷いている。遺物はほとんど出土していないが、底板の上部から牛の骨が検出された。

土壙13 (図 23・25、図版5) 土壙10内の南側に据えられた円形の桶である。上部が外側に開いているが、底径約1.0 m、深さは0.35 mである。埋土は、上から黒色砂質土、黒褐色砂質土、黒褐色粘砂質土、灰黄褐色シルト質粗砂で、底板の下に黄灰色粘土が約1 cm敷いている。埋土からは犬・猫の骨が多量に出土している。また、最上層からは幕末から明治時代の肥前磁器の椀・皿・鉢・壺、京・信楽系の椀・皿・水注・播鉢、土製品などが出土しており、明治時代になってから廃棄されたと思われる。

土壙24 (図 23) C 1 区の西辺で検出した土壙であ

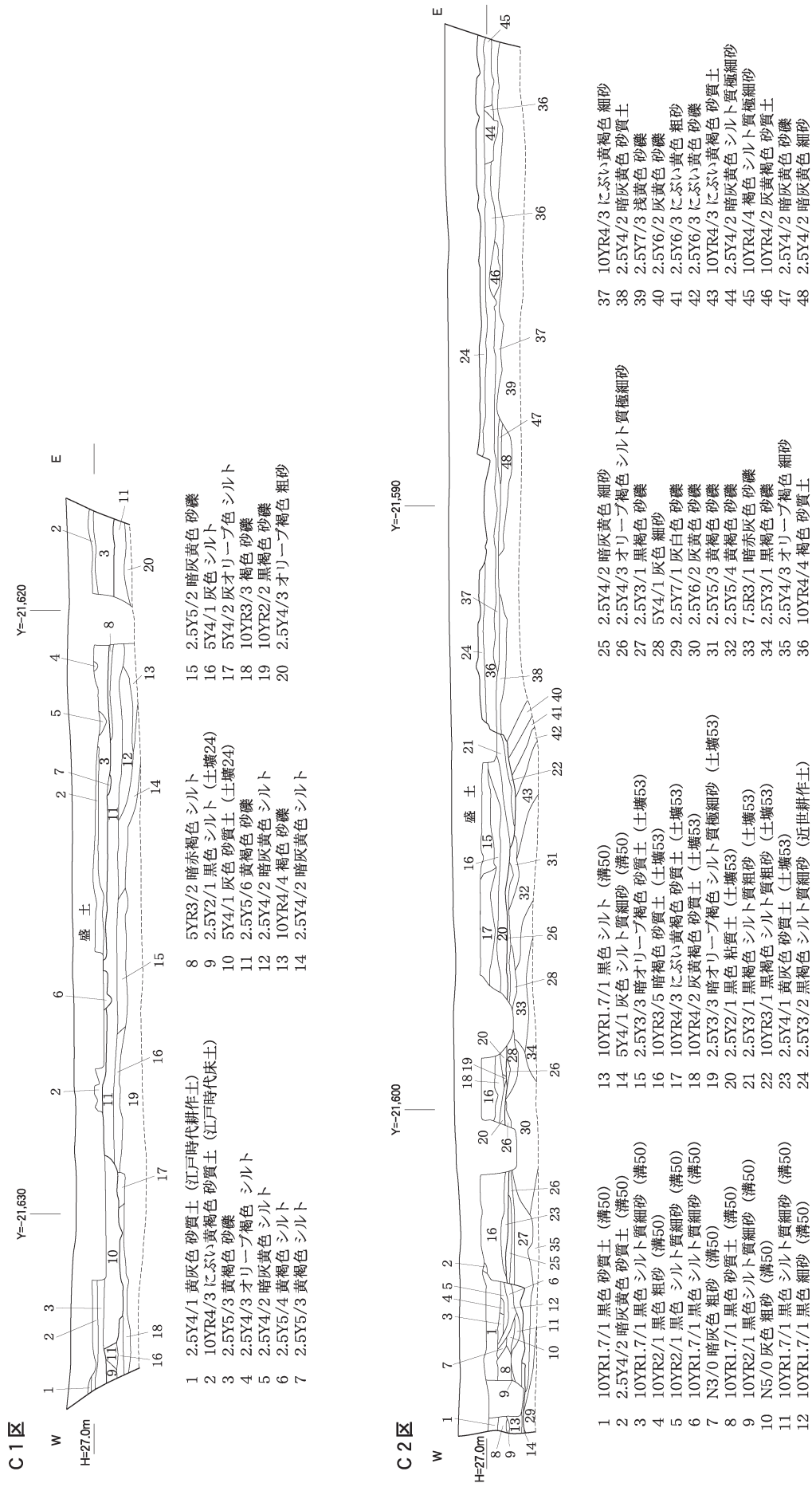


図 21 C1・2区北壁断面図 (1:100)



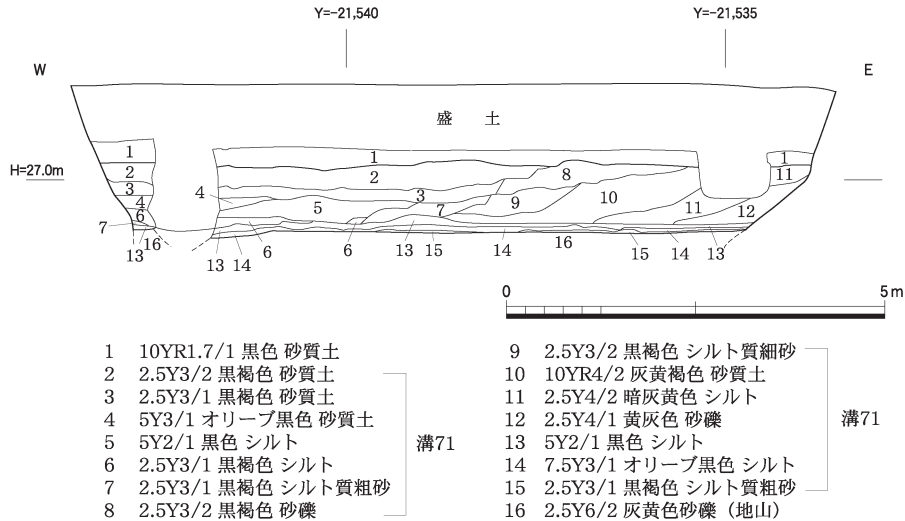


図 22 C 3 区北壁断面図 (1 : 100)

る。東肩のみの検出で、規模・形態とも不明である。底部に矩形の凹部を有する。深さは 0.3 m で、埋土は灰色砂質土である。土師器の皿、京・信楽系陶器の椀・皿、肥前磁器の椀・皿、ルツボ、砥石などが出土している。

土壌 29 (図 26) C 2 区の東辺で検出した土壌である。南北 1.15 m、東西 0.55 m の南北に長い矩形で、深さは 0.3 m である。埋土は黒褐色シルト (炭化物を含む) で、土師器の皿、京・信楽系陶器の椀・皿などが出土している。

土壌 36 (図 26) C 2 区の東辺で検出した土壌である。南北 1.2 m、東西 0.6 m の南北に長い矩形で、深さは 0.4 m である。埋土は黒褐色シルト (炭化物を含む) で、土師器の皿、肥前磁器の椀などが出土している。

土壌 45 (図 26) C 2 区の東辺で検出した土壌である。南北 1.0 m、東西 0.5 m の南北に長い矩形で、深さは 0.4 m である。埋土は黒褐色シルト (炭化物を含む) で、土師器の皿、肥前磁器の椀、京・信楽系陶器の椀などが出土している。土壌 29・土壌 36 と東西に約 2.7 m 間隔に並ぶ。

溝 50 (図 26・27) C 2 区の南端で検出された溝で、調査区の西端で北方に直角に屈曲する。土壌 53 が埋まった後に形成された溝で、東西約 20 m、南北約 4 m にわたって検出した。幅は南側・西側の肩部がともに調査区外に延びるため、規模は不明である、現存南北幅 0.8 m・東西幅 2.5 m である。掘形は垂直に落ち、径 0.02 ~ 0.03 m・長さ 3 ~ 4 m の竹を掘形との間に砂を盛りながら横に積み上げ、0.4 ~ 0.5 m 間隔に丸太杭を打って土留めとしている。深さは 0.45 m で、埋土は黒色シルト系の層が中心となる。また、帯状に緑青の堆積がみられる。土師器の皿、京・信楽系陶器の椀、肥前磁器の椀、瀬戸鉄陶器の銭甕、砥石などが出土している。

土壌 53 (図 26) C 2 区の第 2 面の遺構で、この土壌が埋まってからその他の遺構が形成される。西半で検出した土壌である。東肩部のみの検出で、形状・規模とも不明であるが、南北 5 m 以上、東西 13 m 以上の大きな土壌である。深さは 0.5 m で、黄褐色系の埋土を中心に堆積し、各層に炭化物が含まれている。土師器の皿、肥前磁器の椀・皿、京・信楽系の陶器の椀・皿、肥前陶器の椀、

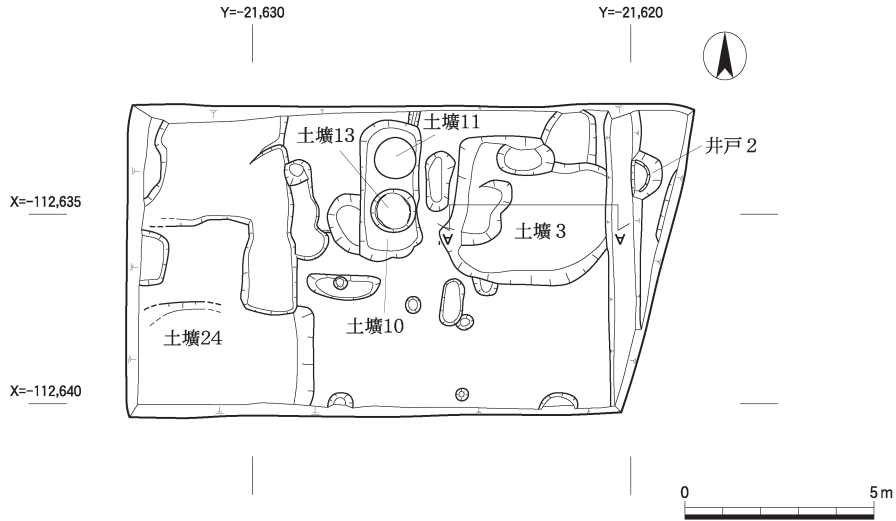


図 23 C 1 区平面図 (1 : 200)

※ 断面の位置は図23参照

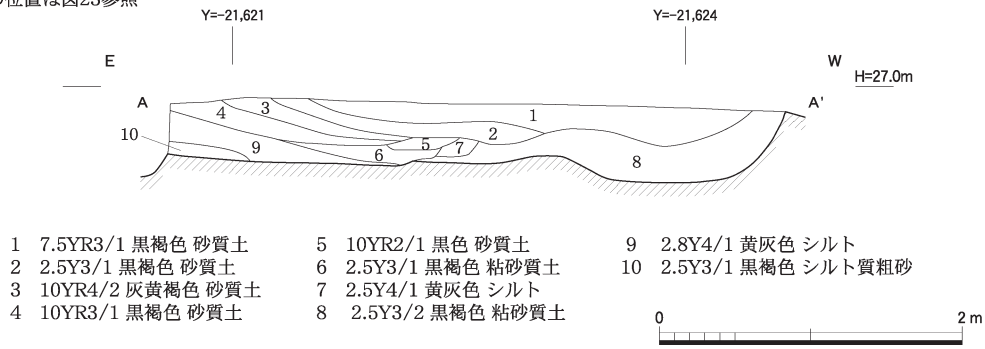


図 24 C 1 区土壙 3 断面図 (1 : 50)

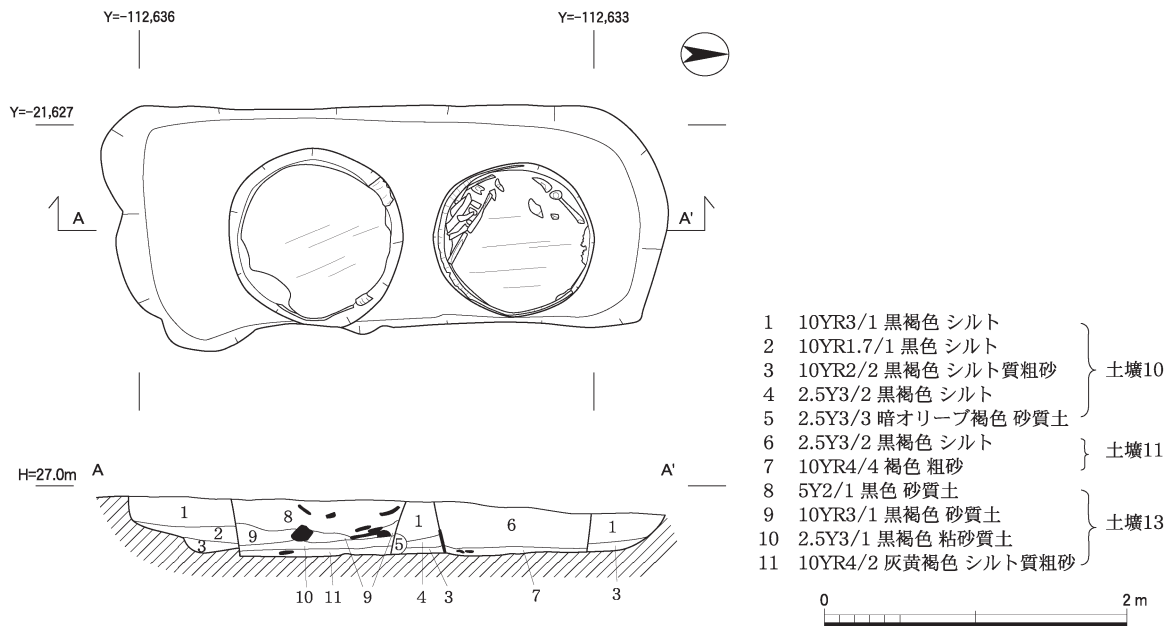


図 25 C 1 区土壙 10・11・13 実測図 (1 : 50)

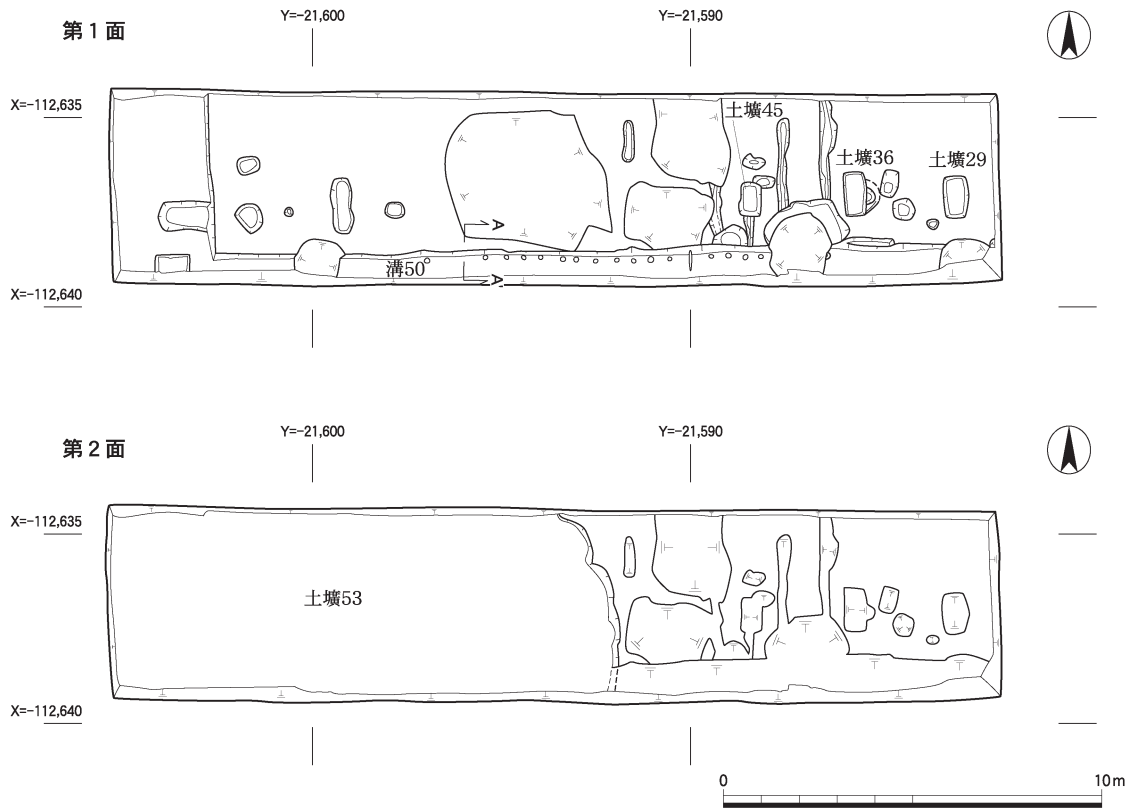


図26 C2区平面図(1:200)

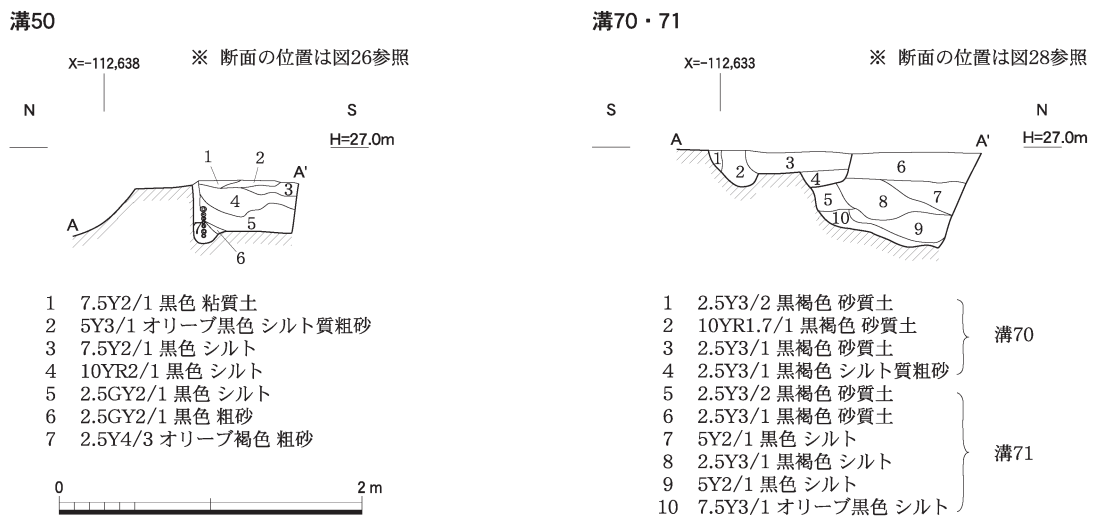


図27 C2区溝50、C3区溝70・71断面図(1:50)

瀬戸の鉄釉陶器の銭褰などが出土している。また、銅滓・炉壁・ルツボ・砥石などの銅鑄造に関連する遺物が多量に出土している。廃棄土壙と考えられる。

溝70(図27・28) C3区の北辺で検出された東西方向の溝である。東西を攪乱に破壊されているが、幅0.8~1.0mで、現存する長さは6mである。南側の肩部には、0.5~0.6m間隔に丸太杭を打ってある。これらは肩部に杭を打ち、そこに板をあて、護岸をしたものと思われる。深さは0.15~0.25mで、埋土は黒褐色砂質土、緑青を大量に含む。土師器の皿、肥前磁器の椀・皿、京・

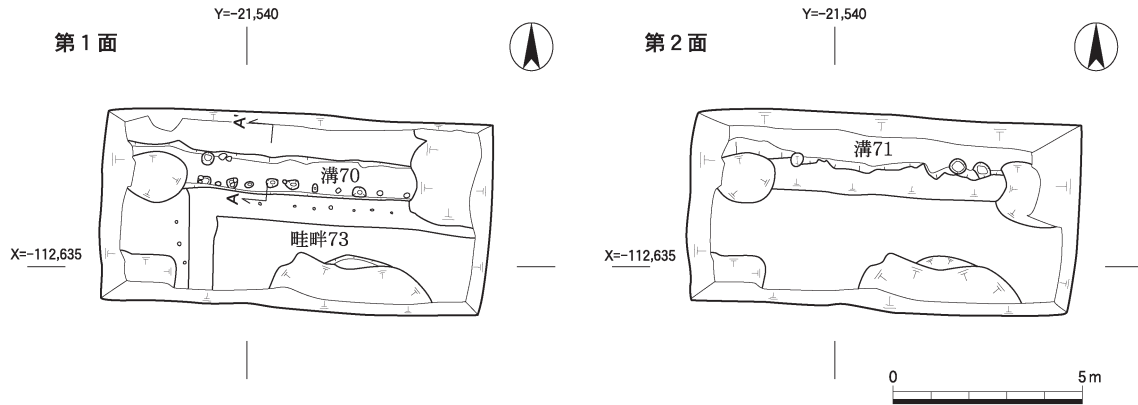


図28 C3区平面図（1：200）

信楽系の陶器の椀・皿、肥前陶器の椀、瀬戸の鉄釉陶器の錢甕などが出土している。また、銅鑄造に関連する遺物が出土している。

溝71（図27・28） C3区の北辺で、溝70の下で検出された東西方向の溝である。南側の肩部のみの確認である。長さは6.0 m以上、幅1.0 mである。深さは0.6 mで、埋土は黒褐色砂質土が中心で、大量の緑青を含む。肩部に0.4～0.5 m間隔に杭もしくはその痕跡を検出した。土師器の皿、肥前磁器の椀・皿、京・信楽系の陶器の椀・皿、肥前陶器の椀、瀬戸の鉄釉陶器の錢甕などが出土している。また、銅滓・炉壁・ルツボ・砥石などの銅鑄造に関連する遺物が多量に出土している。

畦畔73（図28） 溝70の肩部に沿って、幅0.65～0.8 mの鉄分が、沈着した部分が带状に検出された。西辺で南に直角に折れ曲がる。畦畔もしくは土堤の基底部の痕跡と考えられる。畦畔に平行して、0.4～0.5 m間隔に杭の痕跡を検出した。

## 4. 遺物

### （1）遺物の概要（表3）

今回の調査で出土した遺物は、整理箱で166箱、内5箱は木製品である。縄文時代から江戸時代までの遺物が含まれる。大半が土器類で、木製品、石製品（砥石・硯）、金属製品（釘・鋌）、銭貨（寛永通寶・文久永寶）、瓦などが混じる。

縄文時代の遺物として、深鉢の破片が1点出土している。弥生時代の遺物には、磨製石鏃の一部と思われる石片が1点出土している。古墳時代の遺物には、須恵器の杯身・蓋・壺・甕・播鉢、土師器の甕がある。平安時代前期の遺物として、土師器の甕、須恵器の甕・杯、黒色土器の椀、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入磁器、軒丸瓦などが出土している。縄文時代から平安時代前期の遺物は、平安時代末期以降の遺構から出土したものである。

平安時代末期から鎌倉時代の遺物は、条坊側溝・井戸・土壇から出土しており、とくに2基の土器溜りから多量の土師器の皿が出土している。他に、東播系陶器の播鉢、瓦器の椀・鉢・羽釜、

輸入磁器の椀、輸入陶器の盤、軒平瓦、軒丸瓦などが出土している。

室町時代の遺物は、条坊側溝・井戸・土壙から出土し、土師器の皿、瓦器の椀・羽釜・鍋、輸入磁器の椀、施釉陶器の皿、焼締陶器の播鉢などが出土している。

江戸時代の遺物は、溝・土壙から出土し、土師器の皿、染付の椀・皿・壺、施釉陶器の椀・皿・壺・急須、焼締陶器の甕・播鉢、埴塼、木製品の曲物底、石製品の硯・砥石、銭貨の寛永通寶・文久永寶、土製品の人形・玩具などが出土している。

## (2) 土器類

### 1) A区出土土器類(図29～33、図版8・9)

道路1出土土器(1～7)(図29、図版9) 1～3は口径7.9～9.1cmの小型の土師器皿、4～7は口径13.5～14.4cmの大型の土師器皿である。平らな底部から内湾しながら口縁部が外上方にのびる。口縁端部は丸味をおびる。口縁部は1段ナデによる調整を施す。内底面は仕上げナデを施し、底部は無調整である。胎土中に長石・石英・雲母などを含む。色調は1が淡黄色、2・3は灰白色、4～7は淡黄橙色である。

溝3出土土器(8～11)(図29) 8・9は土師器の皿である。8の口縁部は体部との境が明瞭で大きく外方に湾曲する。8・9とも胎土中に長石・石英などを含み、色調はにぶい橙色である。10は常滑焼の甕である。

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
縄文時代	縄文土器				
弥生時代	石鏃				
古墳時代	土師器、須恵器		須恵器3点		
平安時代前期	土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦		瓦1点		
平安時代後期～鎌倉時代	土師器、瓦器、製塩土器、輸入磁器、焼締陶器、瓦		土師器81点、瓦器8点、輸入磁器1点、焼締陶器3点、瓦23点		
室町時代	土師器、瓦器、輸入磁器、施釉陶器、焼締陶器		土師器21点、瓦器7点、輸入磁器5点、施釉陶器3点、焼締陶器1点		
江戸時代	土師器、土師質土器、染付、磁器、軟質施釉陶器、施釉陶器、焼締陶器、木製品、銭貨、金属製品、石製品、土製品		土師器10点、土師質土器7点、染付24点、磁器2点、軟質施釉陶器3点、施釉陶器32点、焼締陶器2点、銭貨23点、木製品13点、石製品12点、土製品14点		
幕末～明治	土師質土器、磁器、塩釉陶器		土師質土器5点、磁器2点、塩釉陶器1点		
合計		184箱	307点(12箱)	122箱	50箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物を抽出したため、出土時より18箱多くなっている。

11は古墳時代の須恵器の播鉢である。円盤状の底部から体部が外上方にまっすぐのびる、底部に多くの円形・楔形の穴がランダムに開けられ、底部を貫通する孔もある。色調は灰色で、胎土・焼成とも良好である。二次堆積遺物である。

溝4出土土器(12~25)(図29) 12~17は口径8.4~9.2cmの小型の土師器皿、18~21は口径14.6~16.0cmの大型の土師器皿である。22・23は口径13.0cmの土師器皿である。12~21は平らな底部から内湾しながら口縁部が外上方にのびる。口縁端部は丸味をおびる。口縁部は1段ナデによる調整を施す。22・23は平らな底部から体部がゆるやかに斜め上方にのび、口縁部はわずかに外反し端部をつまみあげる。口縁部・内面はヨコナデ、内底面は仕上げナデを施す。底部は無調整である。胎土中に長石・石英・雲母などを含む。色調は12・14が灰黄色、13・15~20がにぶい橙色、21は灰白色、22は灰褐色、23は橙色である。

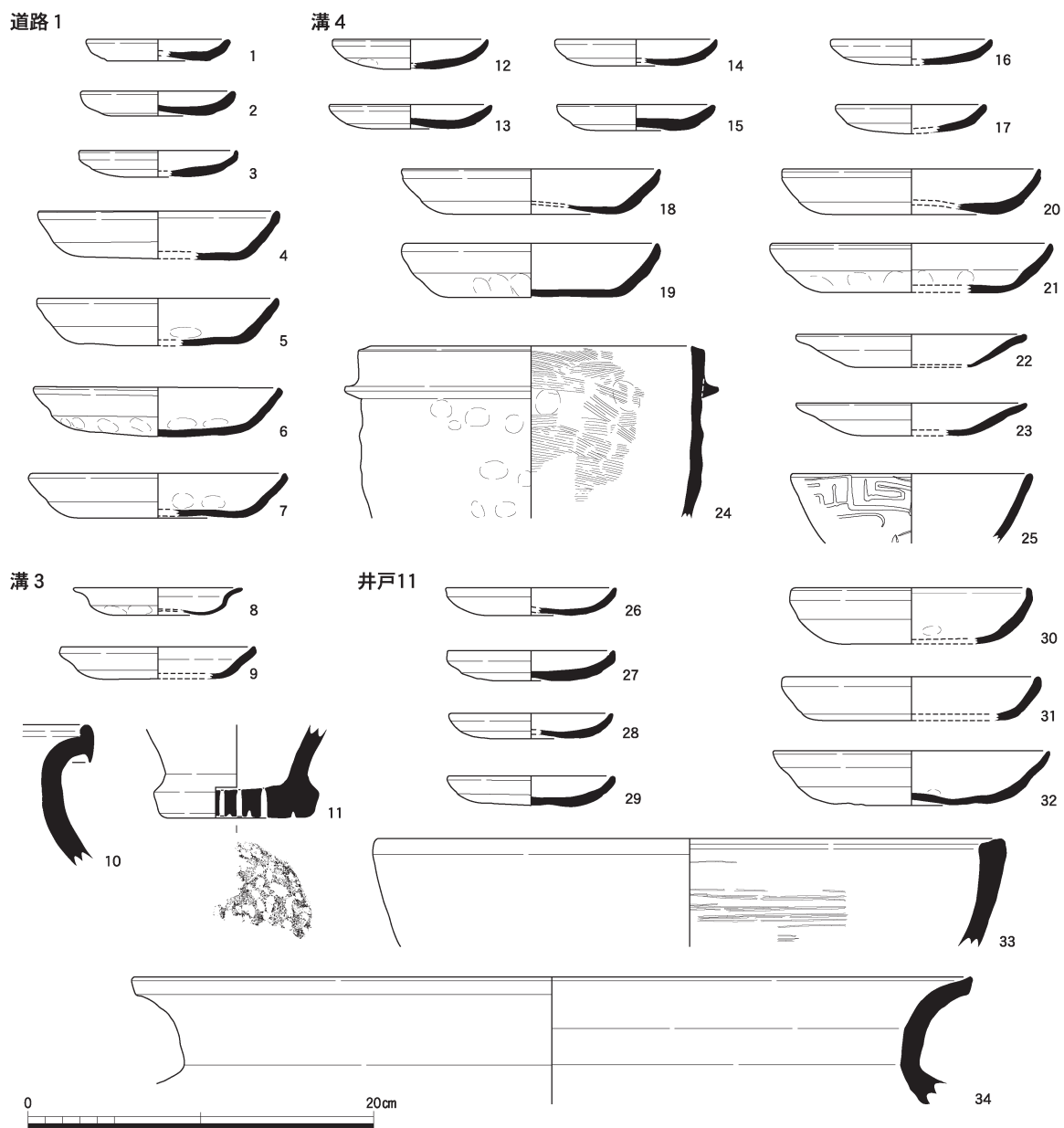


図29 A区出土土器実測図1(1:4)

24 は瓦器の羽釜である。鏝から口縁部にかけてヨコナデ調整、内面は刷毛目調整を施し、外面に指オサエの痕跡が残る。胎土・焼成とも良好で、色調は外面が黒褐色、内面は灰白色である。

25 は輸入青磁の椀で、口縁部に雷文をめぐらす。

22・23・25 は室町時代の土器で、溝の存続期間の下限を示す。

井戸 11 出土土器 (26～34) (図 29) 26～29 は口径 9.2～9.7 cm の小型の土師器の皿、30～32 は口径 13.3～15.8 cm の大型の土師器の皿である。胎土・焼成とも良好で、色調は 26・27・29～31 がにぶい黄橙色、28 は褐灰色、32 は灰黄色である。

33 は瓦質土器の鉢である。口縁端部は平坦で内傾する。口縁部はヨコナデ調整、内面はヨコナデの後に横方向のヘラミガキを施す。内底面は仕上げナデを施し、底部は無調整である。口縁端部と口縁の上半は表面の磨滅が激しい。

34 は焼締陶器の甕である。口縁部は回転を利用したナデ調整を施す。口縁の上半に灰白色の自然釉がかかる。

柱穴 88 出土土器 (35) (図 30、図版 9) 東播系焼締陶器の鉢である。体部は外上方にのび、口縁部は内・外方に肥厚し、端部はへこんでいる。長石などの砂粒を含み、色調は灰色である。

土壙 112 出土土器 (36～57) (図 30、図版 8) 36～53 は土師器の皿である。36・37 はいわゆるコースター形の土師器の皿である。平らな底部から内側に強く折れ曲がる口縁部からなる。口縁部と内面はナデ調整、外面は成形時の指オサエ痕が残る。内底面は無調整である。胎土は白味をおび、雲母・長石を含むが精良である。38～47 は口径 7.7～9.6 cm の小型の皿、48～53 は口径 14.2～14.9 cm の大型の皿である。平らな底部から内弯しながら口縁部が外上方にのびる。口縁端部は丸味をおびる。口縁部は 1 段ナデによる調整を施す。内底面は仕上げナデを施し、底面は無調整である。胎土中に長石・石英・雲母などを含む。色調は 36・42 が橙色、37～41・43・44・47 はにぶい黄橙色、45・46・48～53 はにぶい橙色である。

54 は瓦質土器の鉢である。体部・口縁部は外上方にのび、口縁部は水平になり端部は両側に肥厚する。口縁部と内面はヨコナデ、体部下半と底部の一部に粗いヘラケズリを施す。体部に指オサエが認められる。胎土中に径 1 mm 以下の微砂粒を多く含み、色調は灰色である。

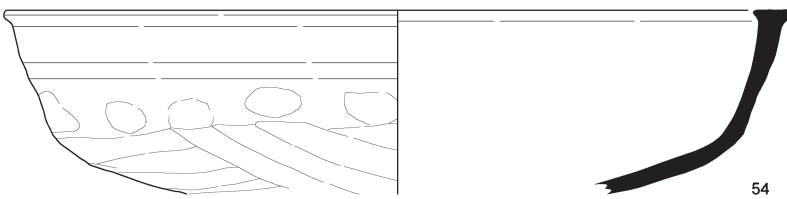
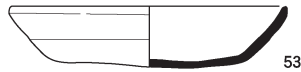
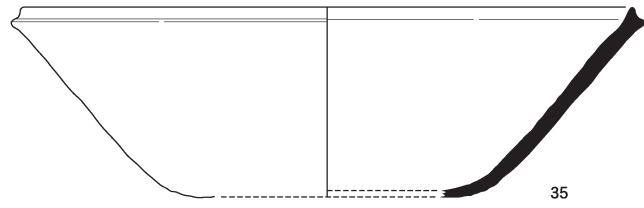
55～57 は瓦器の椀である。体部・口縁部はほぼ直線的に外上方にのび、口縁端部は丸味をおびる。底部に断面台形の高台が付く。口縁部と内面はヨコナデ、体部は指オサエを施す。胎土・焼成とも良好で、色調は灰色である。

土壙 135 出土土器 (58～70) (図 30、図版 9) 58～69 は土師器の皿である。58・59 はコースター形の皿である。60～63 は口径 8.1～8.9 cm の小型の皿、64・65 は器高が 2.0 cm をこえる深めの皿、66～69 は口径 10.8～13.6 cm の大型の皿である。胎土中に長石・チャートなどの砂粒を含む。色調は 58・61・62・64・66・67 がにぶい黄橙色、59・60・65 は浅黄色、63・68・69 は灰白色である。

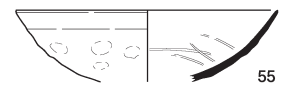
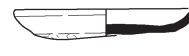
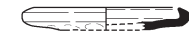
70 は龍泉窯系の青磁の椀で、高台端部は無釉であるが、他は全面に釉がかかり、貫入がはいる。

土壙 210 出土土器 (71～90) (図 30、図版 8) すべて土師器の皿である。71～75 はコースター

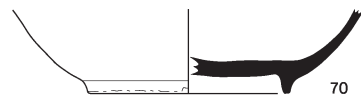
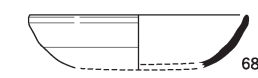
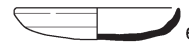
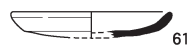
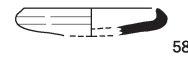
柱穴88



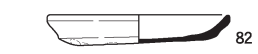
土坑112



土坑135



土坑210



土坑225

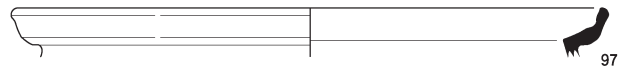
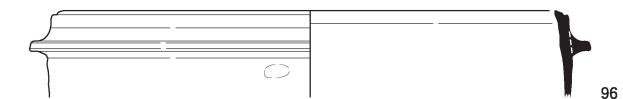
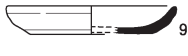


图 30 A区出土土器实测图2 (1:4)



形の皿である。76～82は8.3～9.4 cmの小型の皿、83～85は器高が2.0 cmをこえる深めの皿、86～90は口径13.5～14.2 cmの大型の皿である。胎土中に長石・石英などの砂粒を含み、色調は71が灰黄褐色、72・74～76・79～88・90はにぶい黄橙色、73・77・78・89はにぶい橙色である。

土壙225出土土器(91～97)(図30、図版9) 91～95は土師器の皿である。91～93は口径8.2～9.0 cmで、口縁部は1段ナデ(91・92)と2段ナデ(93)の2種がある。94は口径12.2 cmの大型の皿である。粘土板成形口縁部と内面はヨコナデ調整、内底面は仕上げナデ、底部は無調整である。体部に指オサエの跡が残る。胎土中に長石・チャートなどの砂粒を含む。95は口径13.0 cmの大型の皿で、口縁部は2段ナデである。色調は91・93が灰白色、92は浅黄橙色、94・95はにぶい黄橙色である。

96は瓦器の羽釜、97は瓦器の鍋である。96は罎から口縁部にかけてヨコナデ調整、内面は刷毛目調整を施し、外面に指オサエの痕跡が残る。97は口縁部が外方に折れ曲がり、端部は外傾する。ヨコナデによる調整を施す。96・97は暗灰色である。

井戸35出土土器(98～104)(図31・32、図版9) 98～101は土師器の皿である。98は底部が内側に突出したいわゆる「ヘソ皿」である。粘土板成形で、外面に手のひらと指の圧痕が残る。内面はヨコナデ調整、内底面は無調整である。99～101は口径12.4～13.3 cmの大型の皿で、体部・口縁部が低く外方にのびる。口縁部と内面はヨコナデ、内底面は仕上げナデを施す。石英・長石・チャートなどの砂粒を含み、色調は98が浅黄橙色、99～101は灰白色である。

102は、瀬戸・美濃系の鉄釉の小型の水注である。胴部から上半に釉がかかり、底部に糸切り痕が残る。

103は龍泉窯の輪花皿である。焼成温度が低かったと思われ、釉の発色が悪い。

104は瓦器の羽釜である。罎は短く丸味をおび、口縁端部は内傾する。罎から口縁部にかけてヨコナデ調整、内面は刷毛目調整を施し、外面に指オサエの痕跡が残る。

井戸45出土土器(105～107)(図32) 105は信楽の片口の播鉢である。内面に3条1単位の播り目をいれる。底部が無調整である以外は、ヨコナデ調整を施す。

106は瀬戸・美濃系の鉄釉を施したいわゆる「天目」の椀である。

107は瓦器の羽釜で、断面三角形の低い罎がつく。

溝71出土土器(108～134)(図32、図版9) 108・109は古墳時代の須恵器の杯蓋と身で、二次堆積遺物である。

110～124は土師器の皿である。110は底部が内側に突出した「ヘソ皿」である。111・112は器高が2 cmをこえる深めの小型の皿である。113・114は口径がそれぞれ7.9 cm、7.7 cmの小型の扁平な皿である。115は内面の体部と底部の境に沈線がめぐる。116～124は口径10.9～12.4 cmの大型の皿である。平らな底部から内湾しながら口縁部が外方にのびる。口縁端部は内側につまみだす。



図31 井戸35出土鉄釉水注

口縁部は1段ナデによる調整を施す。内底面は仕上げナデを施し、底面は無調整である。体部に指オサエ痕が残る。121～124は深めの皿である。胎土中に長石・チャートなどの砂粒を含み、色調は110・121～124が灰白色、他はにぶい黄橙色である。

125～127は龍泉窯の青磁碗である。いずれも外面に蓮弁文を描く。127は口縁端部が内側にすぼまるいわゆる「束口」の碗である。128は「口はげ」の白磁の皿である。

129は美濃・瀬戸系の施釉陶器のおろし皿で、内底面に格子状におろし目を刻んでいる。

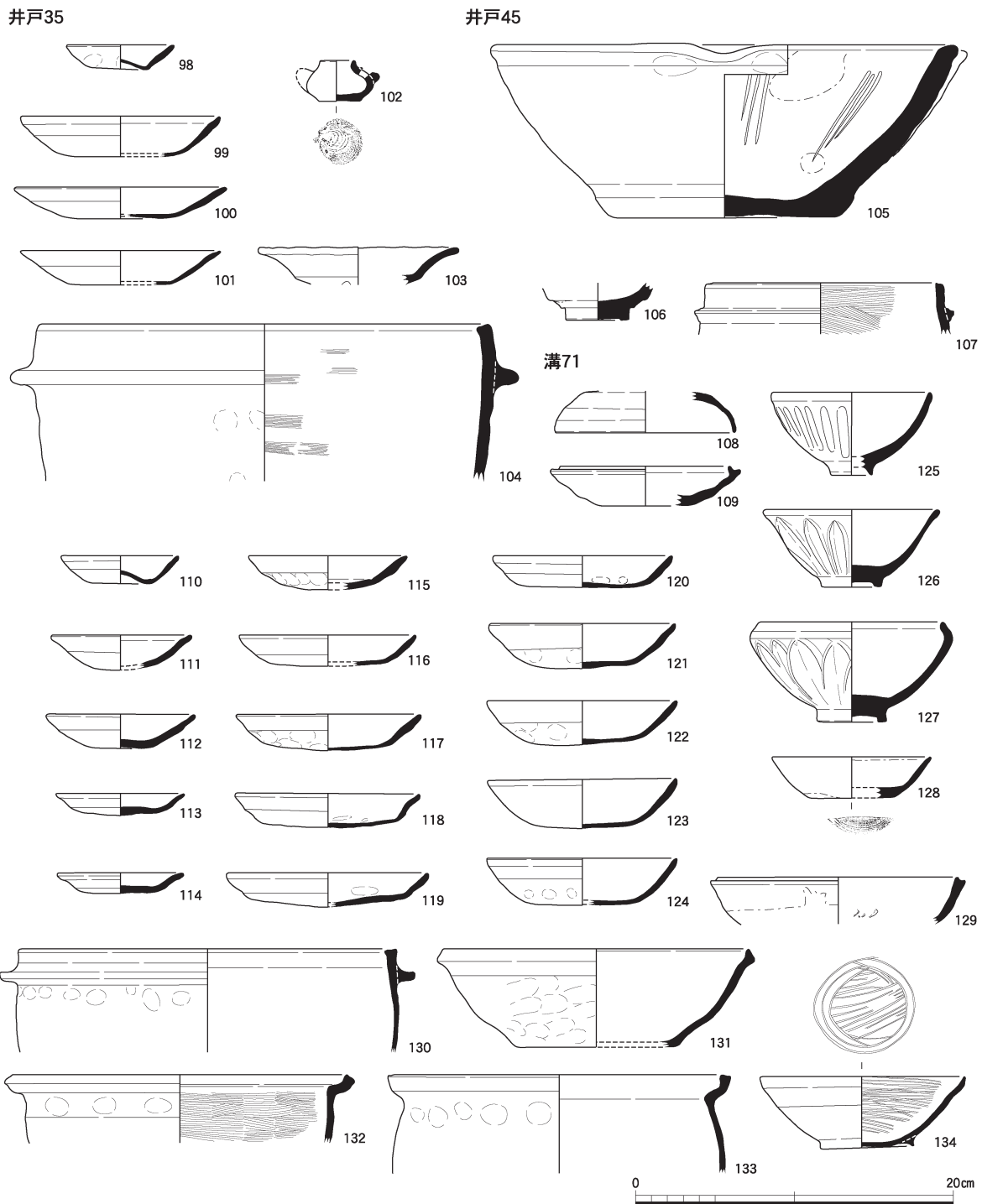


図32 A区出土土器実測図3 (1:4)

130～134は瓦器である。130は羽釜である。131は鉢で、体部・口縁部は外上方にのび、口縁端部は断面三角形である。口縁部と内面はヨコナデ調整を施し、外面に指オサエの痕跡が残る。132・133は鍋である。134は椀で、体部は外弯気味に上方にのび、口縁部は体部との間に浅い凹み外側にひろがる。底部に断面台形の扁平な高台がつく。口縁部はヨコナデ、内面はヨコナデの後に密なヘラミガキを施す。内底面にヘラミガキで、3重の圏線とその中に平行線を描く。

包含層（暗オリーブ褐色粘質土）

出土土器（135～139）（図33）

135～137は土師質土器の蓋である。135は白色の精製された粘土によって作られている。用途は不明。136・137は胞衣壺の蓋である。ロクロ成形で、頂部に糸切り痕が残り、他は回転ナデを施す。138・139は胞衣壺である。ロクロ成形で、底部に糸切り痕が残り、他は回転ナデを施す。

現代土壌出土土器（140～142）

（図33）140・141は珉平焼の椀である。140は黄・緑・白のいわゆる三彩を施したもの。141は濃緑色の釉を施す。

142は輸入塩釉陶器のジン・ボトルの破片である。

## 2) C区出土土器類（図34～36、図版10）

土壌3出土土器（143～177）（図34、図版10）143～146は土師器の皿である。143・144は手捏ね成形の小型の皿である。

145・146は丸底気味の底部から口縁部が外上方にのびる皿である。口縁部と内底面の境に圏線がめぐる。口縁部上半・内面はヨコナデ、口縁部下半は指オサエ、内底面は仕上げナデを施す。145の口縁端部にはスガが付着する。色調は143が明赤褐色、144はにぶい褐色、145・146は橙色で、いずれも胎土・焼成は良好である。

147～152は土師質土器である。147・149は小鉢である。147は手捏ね成形、149はロクロによる成形で底部にヘラ切りの痕が残る。色調は147が淡黄色、149は橙色で、どちらも胎土・焼成は良好である。148は小型の壺である。

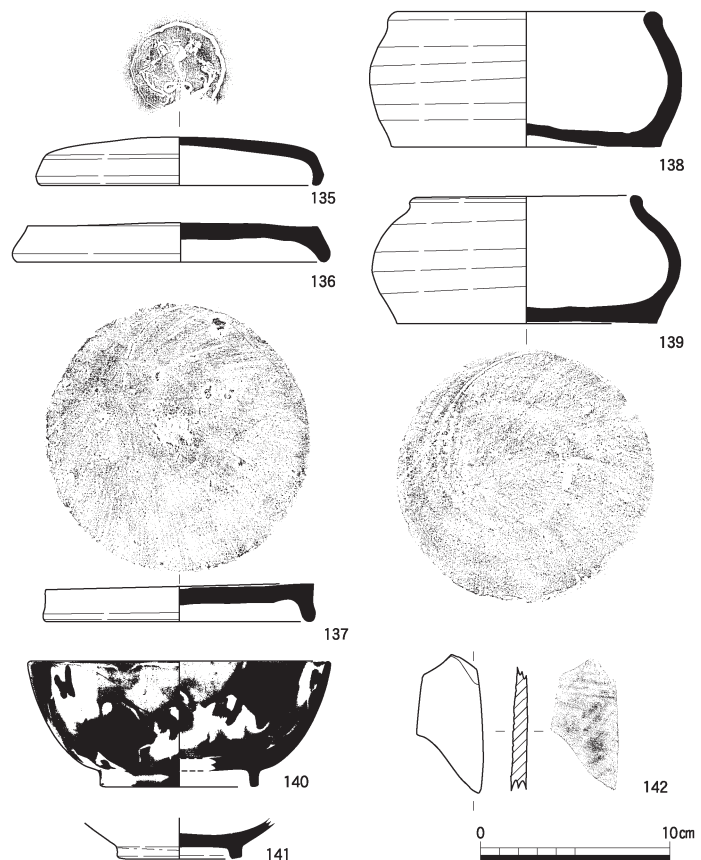


図33 A区出土土器実測図4（1：4）

手捏ね成形で、色調は淡黄色、胎土・焼成とも良好である。150～152は火入れである。150・151は小型で、低い高台をもつ底部に筒形の胴部が付く。どちらもロクロによる成形で、150は底部に長方形枠「深□（草?）」の刻印、151は底部に「□慶深草」の刻印がある。152はロクロに成形よる大型の火入れで、胴部外面を丁寧へら磨きしている。口縁端部は敲打痕されており原形をとどめない。口縁内部の上方から約3cmまでにススが付着している。151は赤褐色の胎土に白色の粘土が縞状に練り込まれた、いわゆる絞胎と呼ばれるものである。色調は150が赤褐色、152はにぶい橙色、いずれも胎土・焼成は良好である。

153～155は軟質施釉陶器である。153・154はロクロ成形のいわゆる柿釉の灯明皿である。153は口縁の一端につまみ状の把手が付く、内面に7条1単位の直線櫛描き文を2箇所併行に描く。154は内面に3条1単位の直線櫛描き文を描く。どちらも口縁端部にススが付着する。155は口縁端部・内面に淡緑灰色の釉を施す灯明受皿である。ロクロ成形で口縁内部に3箇所ハリピン状の突起をもつ。口縁端部にススが付着する。

156～164は京・信楽系の施釉陶器である。156は灯明受皿である。口縁端部・内面に灰オリーブ色の釉を施す。157は鉄釉に灰釉流しの筒椀である。胴部外面のみの施釉で、口縁端部に重ね焼きの痕跡が残る。158は筒椀で、胴部に2条の帯状のサビ絵を描く。159は筒形椀で、白化粧の上にサビ絵を描く。内底面に緑色のキズ隠しが認められる。160は丸椀で、上絵が描かれ高台内面に「正」と墨書されている。161は小杉椀で、上絵が描かれている。162は丸椀で、サビ絵が描かれている。163は丸椀である。164は平椀である。

165・166は瀬戸陶器の鉄釉の筒形の甕で、銭甕または半胴甕と呼ばれるものである。底部は糸切りの平底で、底部を除く全面に厚さ1mm前後の鉄釉が施されている。165の底部に「元」が刻印されている。

167は堺・明石系の焼締陶器の播鉢である。

168～177は肥前磁器で、168は白磁、169～177は染付である。168は小型の紅皿である。169は草花文を描く紅皿である。170～173は粗製の椀で、170・173は見込蛇の目釉剥ぎである。171は菊花のコンニャク印、172は草花文に菊花のコンニャク印を併用、173は梅花繫文を描く。174は粗製の壺である。175～177は粗製の見込に蛇の目釉剥ぎの皿である。176は陶胎染付で、白化粧を施したうえに染付されている。175は草花文、176は格子文を内面のみに、177は内面に梅樹文繫、見込みにコンニャク印五弁花がある。

土壙10出土土器（178～181）（図35）178は京・信楽系の施釉陶器の筒形椀で、白化粧の上にサビ絵を描く。179～181は肥前磁器である。179は青磁染付の椀である。外面青磁の釉がかり、内面の口縁部四方禪文を描く。見込みには二重圏線とコンニャク印五弁花を施す。高台内面には崩れた「角福」を描く。180は粗製の白磁・仏飯器である。181は端反椀で、網干文を描く。

土壙13出土土器（182～196）（図35）182・183は京・信楽系の施釉陶器、185は産地不明の施釉陶器である。182は皿で、見込みにトチンの目跡が残る。183は片口が付く鉢で、白化粧の上にサビ絵を描く。185は小型の播鉢で、口縁部に鉄釉がかかる。184は備前の焼締陶器片で

土坑 3

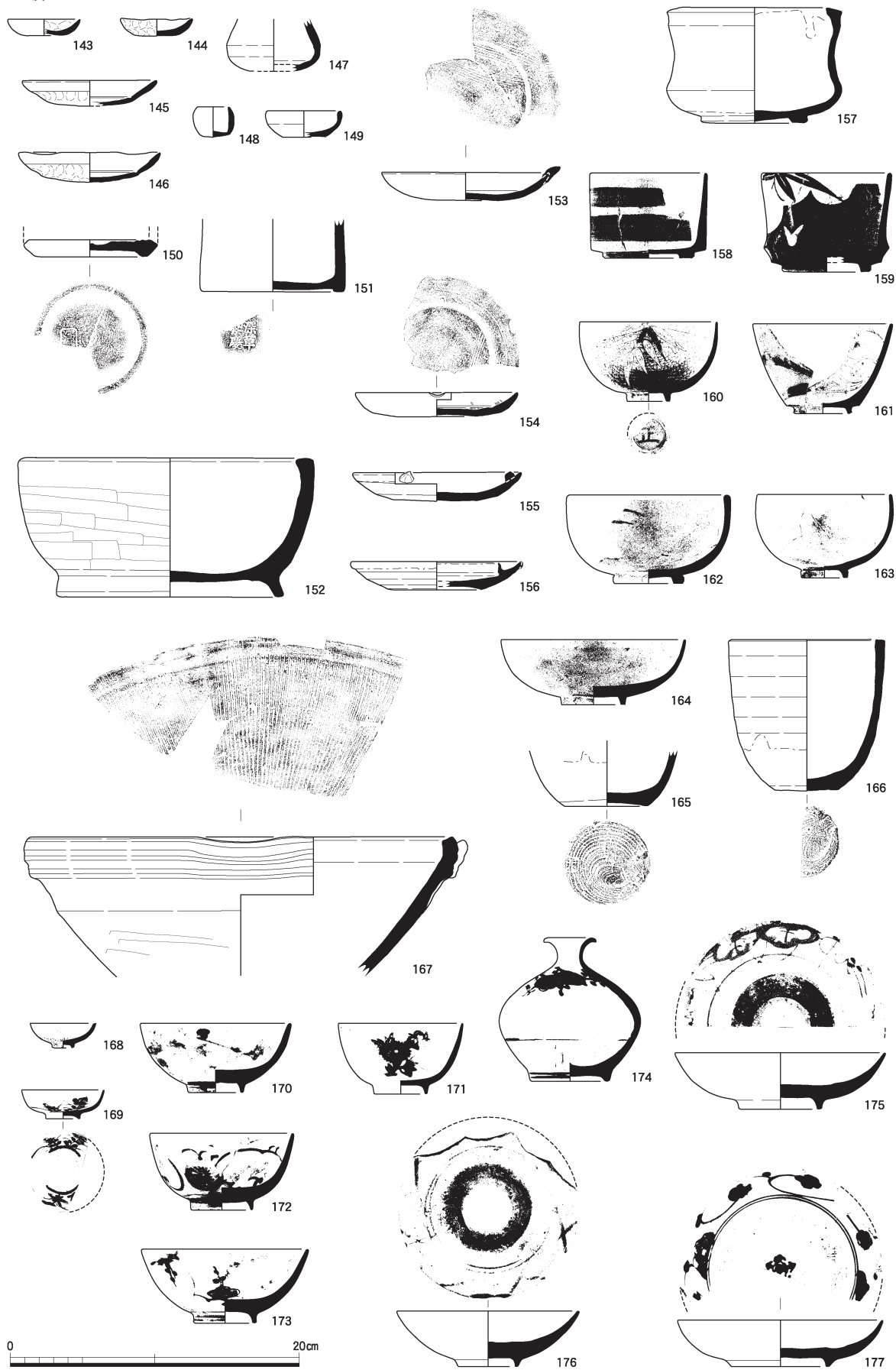


图 34 C区出土土器实测图 1 (1:4)

ある。

186は京都産の磁器、187は中国産と思われる磁器、188～193・195は肥前磁器、194・196は産地不明の磁器である。186は白磁の煎茶湯冷ましである。木葉形で、注ぎ口は象口造である。187は薄手の染付の高杯である。杯部に花卉文、脚部の連弧文を描く。高台の端面は無釉

土壙10

土壙13

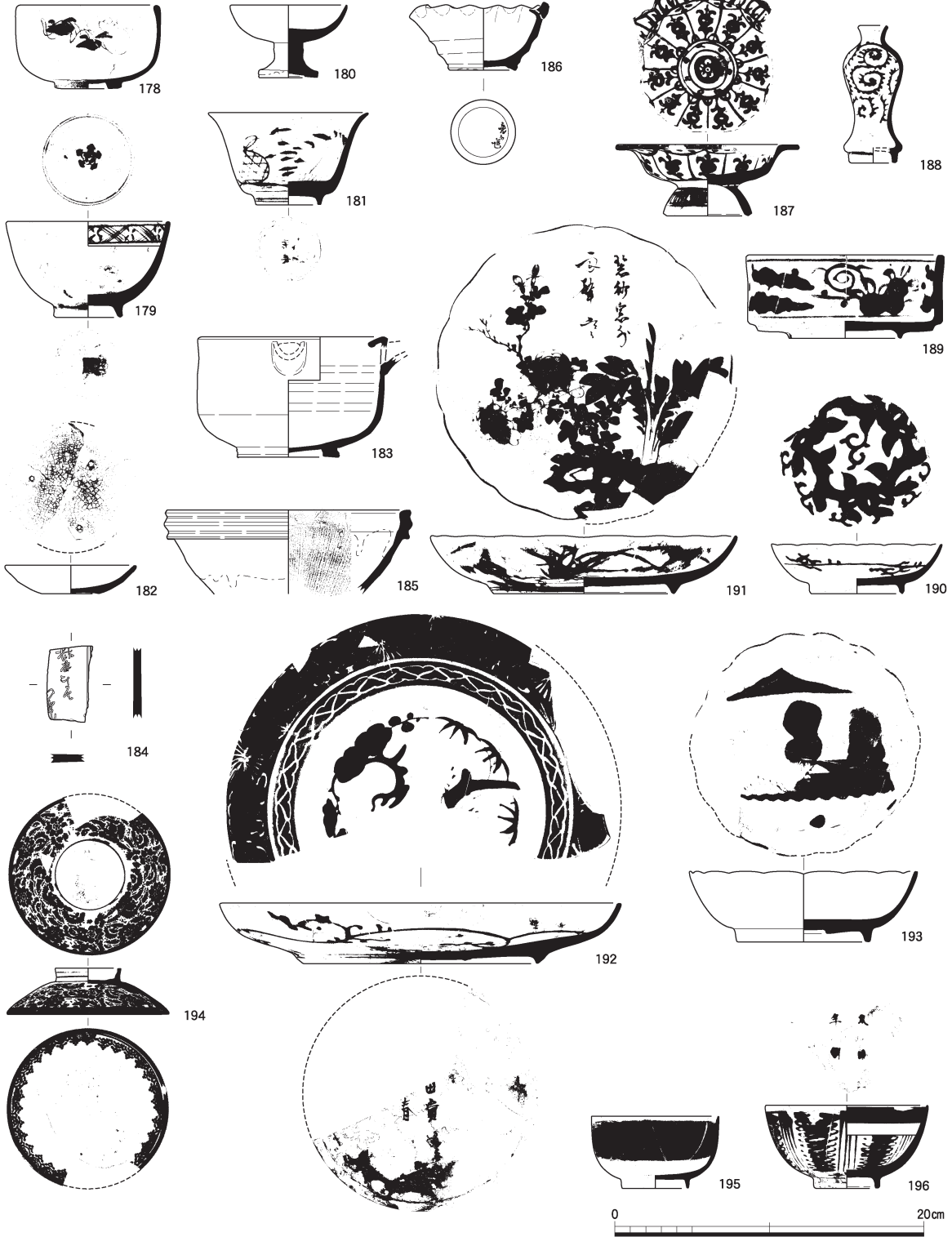


図35 C区出土土器実測図2 (1:4)

である。188 は小型の壺で、蛸唐草文を描く。189 は重ね小鉢で、重ね部の口縁端部と底部の外周は無釉である。草花繫文を描く。190 は小型の輪花皿で、樹文を描く。191 はやや大型の輪花皿で、内面に草花文、外面に草文と「凝如漢女顔□□」と描かれている。192 は大型の皿で、内面にスミハジキに松竹梅繫、外面は梅樹繫、底部内に「富貴長春」と描かれている。193 は口縁端部に鉄釉を塗るいわゆる口紅の輪花皿で、蛇の目凹形高台をもつ。内面に山水文を描く。194 は酸化コバルトの釉を使った型紙銅版転写で模様を描いた蓋である。195 は椀で、刷毛目を描く。196 は椀で、幾何学文を描く。見込に「太明年製」の銘をもつ。

土壙 29 出土土器 (197 ~ 199) (図 36) 197 は土師器の皿で、丸底気味の底部から口縁部が外上方にのびる皿である。口縁部と内底面の境に圈線がめぐる。198・199 は肥前陶器である。198 は見込蛇の目釉剥ぎの鉢である。199 は刷毛目文の椀である。

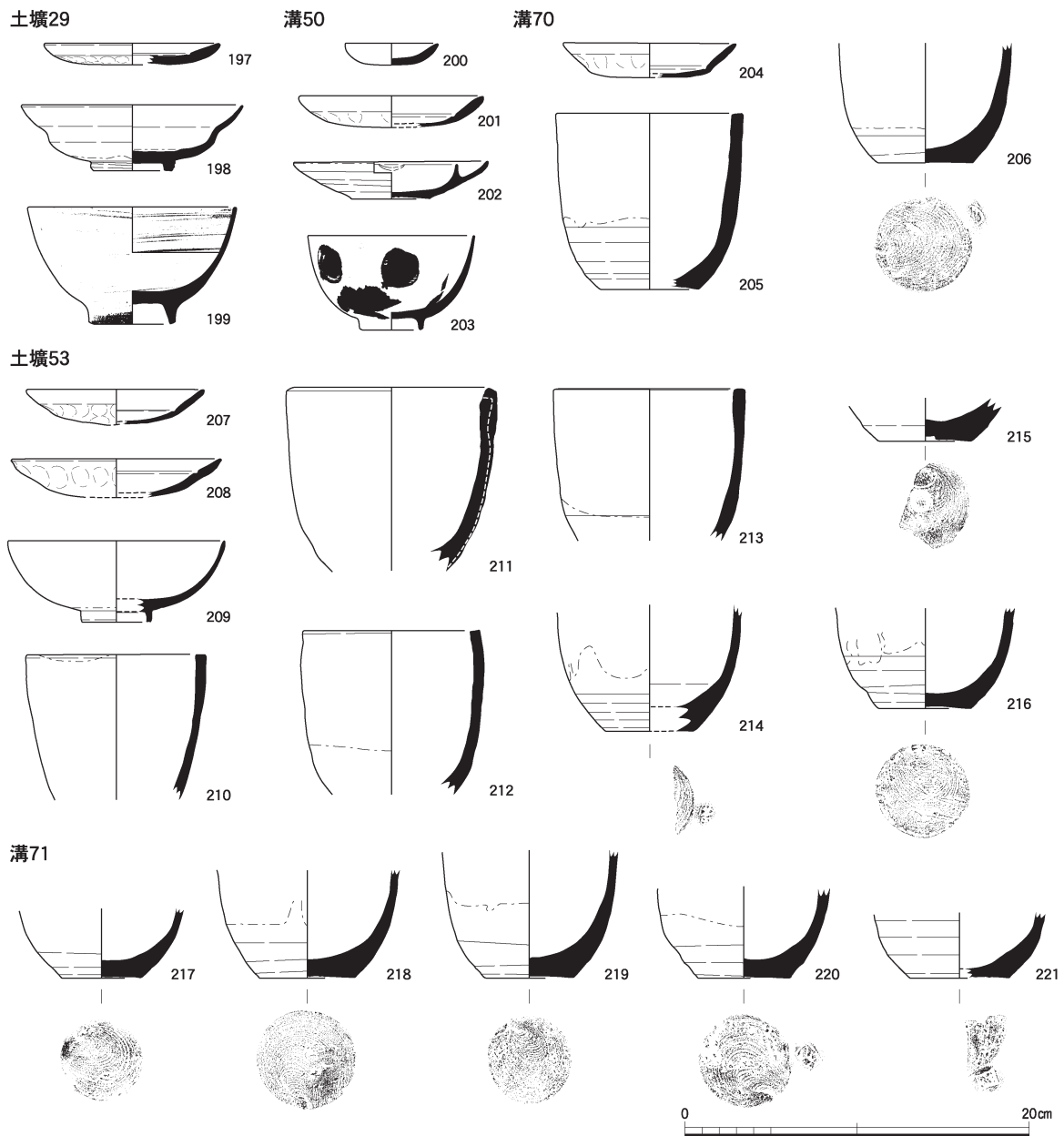


図 36 C区出土土器実測図3 (1 : 4)

溝 50 出土土器 (200～203) (図 36) 200・201 は土師器の皿である。200 は手捏ね成形の小型の皿、201 は丸底気味の底部から口縁部が外上方にのびる皿である。口縁部と内底面の境に圈線がめぐる。202 は京・信楽系の施釉陶器の灯明受皿である。203 は粗製の肥前磁器の椀で、菊花のコンニャク文を施す。

土壙 53 出土の土器 (207～216) (図 36、図版 10) 207・208 は土師器の皿である。209 は肥前磁器の平椀である。210～216 は瀬戸陶器の鉄釉の筒形の甕で、錢甕または半胴甕と呼ばれるものである。底部は糸切りの平底で、底部を除く全面に厚さ 1 mm 前後の鉄釉が施されている。211 は高火度の熱を受けており、内面に湯滓やガラス質の被膜が認められる。外面に 1～4 mm の厚さで被覆された土が熱変して堅く焼締まり、ヒビ割れ多く認められる。底部もしくは底部側面に 214 は「甚」、215 は○内に「吉?」、216 は方形の枠に「山」が刻印されている。

溝 70 出土土器 (204～206) (図 36) 204 は口縁部と内底面の境に圈線がめぐる土師器の皿である。205・206 は瀬戸陶器の鉄釉の錢甕である。206 は底部側面に小判形の枠内に「久?」が刻印されている。

溝 71 出土の土器 (217～221) (図 36、図版 10) すべて瀬戸陶器の鉄釉の錢甕である。217～219 の底部に小判形の枠内に「久?」、220 の底部側面に方形の枠に「山」、221 の底部側面に矩形の枠に「甚」が刻印されている。

### (3) 瓦類 (図 37、図版 11)

軒丸瓦 (222～232) 222 は重圈文の軒丸瓦である、圈線 2 重目と 3 重目の間隔は等しい。周縁・裏面はナデ調整を施す。胎土は密で、焼成は良好、色調は黄灰色である。

223・224 は中房に 1 + 8 蓮子を配し、外区に二重圈線をもつ軒丸瓦である。瓦当部裏面の上端に丸瓦をあて、粘土を付加して接合する。色調は灰色で、胎土は須恵質で、焼成は良好である。

225 は複弁八葉蓮華文をもつ小型の軒丸瓦である。胎土中に 3 mm 以下の砂粒を含む。焼成は良好で、色調は黄灰色である。

226 は単弁八葉蓮華文の軒丸瓦である。花卉は非常に簡略化された三角形となる。色調は灰白色で、胎土中に 6 mm 以下の砂粒を含む。

227～232 は三巴文軒丸瓦で、中房に三巴文、外区に圈線と珠文帯をもつ。229 は左巻き、他は右巻きの巴文を表す。胎土中に径 3 mm 以下の砂粒を含み、焼成は良好で、色調は 227・229・231 がにぶい黄橙色、228・230・232 は灰色である。

229・230 以外は A 区からの出土で、222 は井戸 35、223 は土壙 210、224 は土壙 192、225 は土壙 176、226 は土壙 112、227 は土壙 204、228 は土壙 168、231 は土壙 159、232 は溝 3、229 は B 区の氾濫堆積層、230 は C 区現代土壙から出土している。

軒平瓦 (233～245) 233～239 は偏行唐草文の軒平瓦である。瓦当部の成形は 235・237 が包込み、不明の 239 を除いて他は半折曲げである。胎土中に 5 mm 以下の砂粒を含み、焼成は良好である。色調は 233 がにぶい橙色、234 が灰色、235～238 が灰白色、239 は黄灰色である。



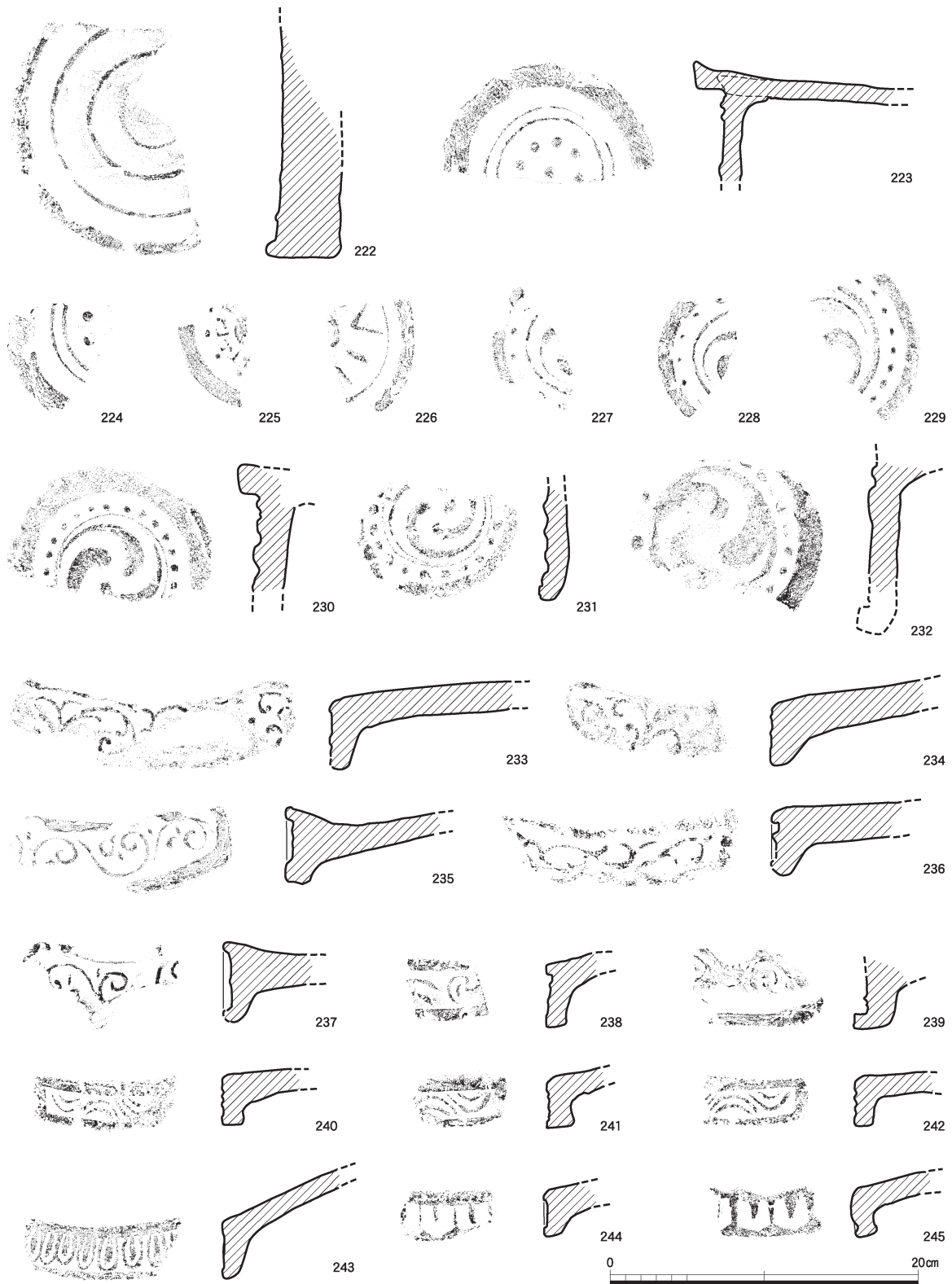


図 37 軒丸瓦・軒平瓦拓影・実測図（1：4）

233 は二次焼成を受けて赤変している。

240～242 は水波文の軒平瓦である。瓦当は折り曲げ成形で、胎土中に 5 mm以下の砂粒を多く含む。焼成やや軟質で、色調は浅黄橙色である。

243～245 は剣当文の軒平瓦である。243 は単弁状の剣当文で放射状に配する。瓦当は折り曲

げ成形で、胎土中に5mm以下の砂粒を多く含む。焼成やや軟質で、色調は浅黄橙色である。

すべてA区からの出土で、233・234は井戸11、235・238は土壙112、236は土壙159、237・239・242は土壙210、240は土壙209、241は溝71、243は土壙205、244は遺構検出中、245は土壙218から出土している。

#### (4) その他の遺物

##### 1) 木製品 (図38)

板材 (246～248) 246は一端が三角形に尖った、長さ14.6cm・幅2.0cm・厚さ0.25cmの板状の木製品である。247は台形をした板材で、下辺の一方の角が丸くなっている。上辺の長さ8.3cm・下辺の長さ14.5cm、角が残る斜辺の長さは9.3cmである。厚さは2.6cmである。248は上辺の両端が丸味を帯びる、長さ16.8cm・幅7.7cm・厚さ1.05cmの板材である。中央よりやや上に径約3.0cmの円孔を穿つ。246・247はC2区土壙53、248はC2区溝50から出土している。

曲物 (249～251) 249は小型の曲物の底で、径6.2cm・厚さ0.35cmである。250は円形の曲物の底板で、径6.7cm・厚さ0.4cmである。251は曲物の蓋と思われる、半ばを失っているが円形になる板材である。中心より外縁に約2.0cmよった所に、幅0.6cm・長さ1.6cmの桜の皮で、紐状のつまみを取り付けている。径11.8cm・厚さ0.45cmである。249はC2区土壙53、250・251はC2区溝50から出土している。

箸 (252～258) 252は残存長13.1cmである。幅0.6cm・厚さ0.4cmで断面矩形を呈する。253～258は、いずれも割木を粗く削って成形し、両端は削っている。長さは24cm(8寸)、21cm(7寸)の2種がある。断面は多角形である。すべてC2区土壙53から出土している。

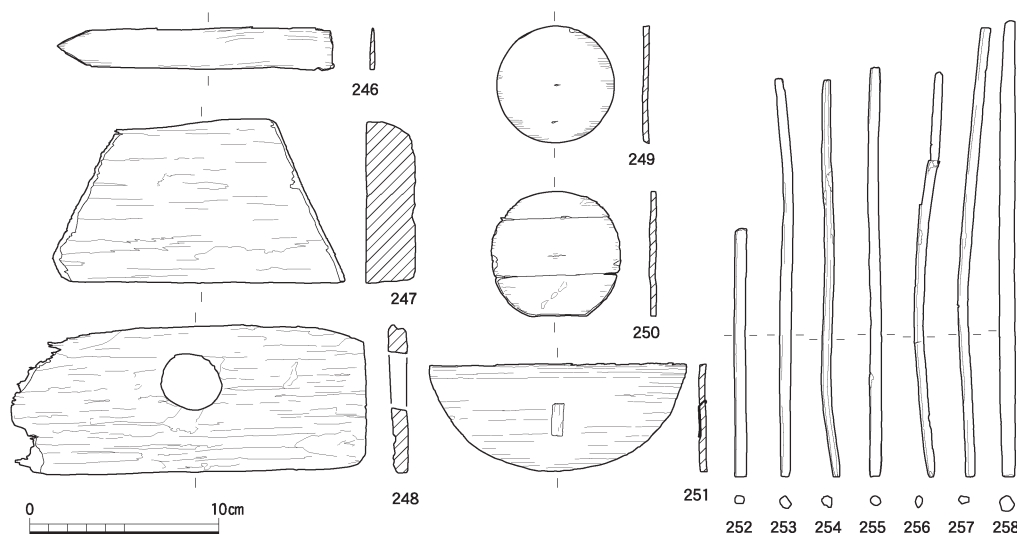
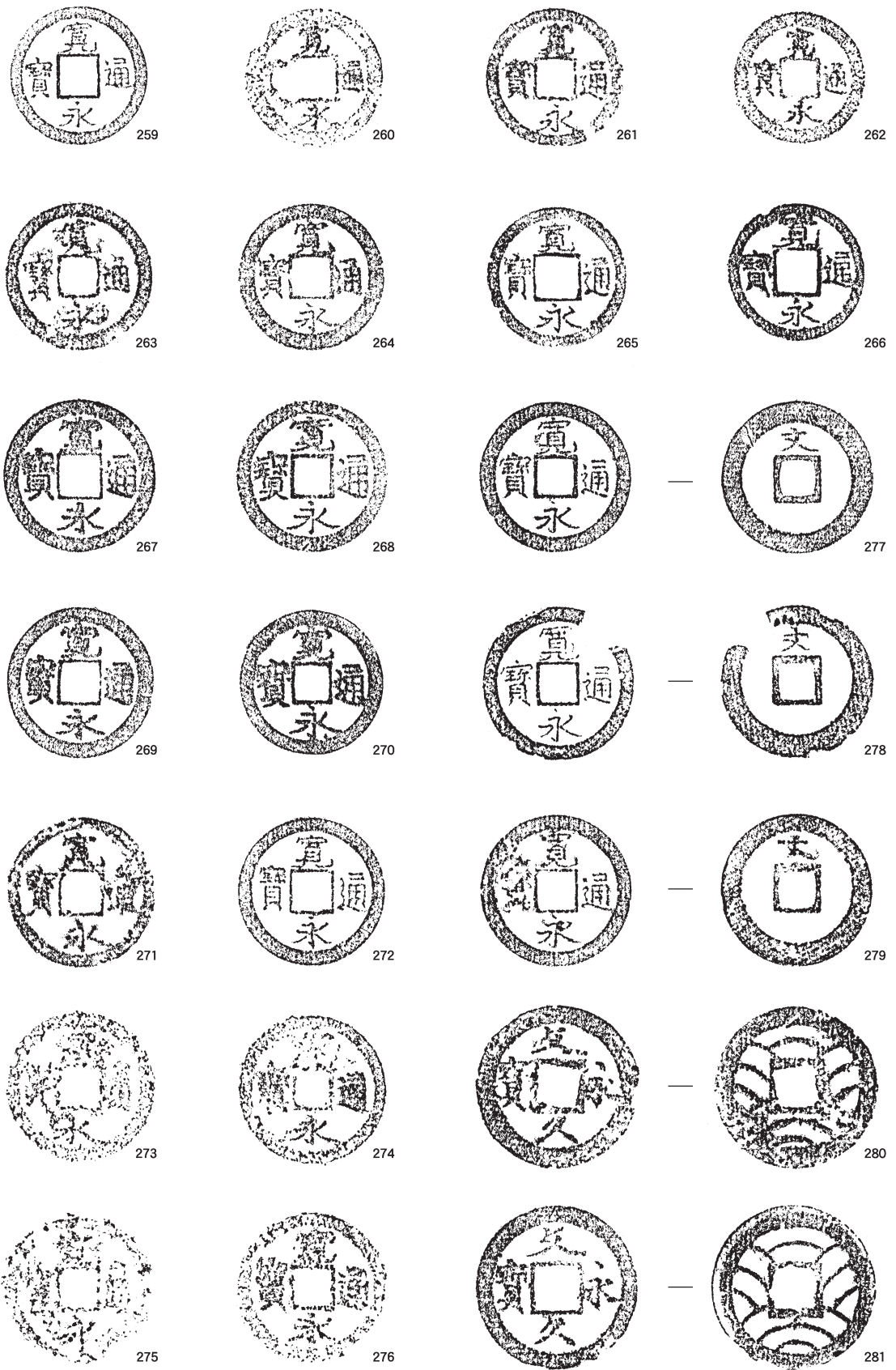


図38 木製品実測図 (1:4)



0 5 cm

图 39 钱货拓影 (1:1)

2) 銭貨 (図 39、図版 12)

寛永通寶 (259 ~ 279) 259 ~ 266 は径 2.2 ~ 2.3 cm の小型のものである。264 は孔内の一部にバリを残す。267 ~ 279 は径 2.4 ~ 2.5 cm の比較的大型のものである。277 ~ 279 は背面に「文」が記されている。279 の「寶」はくずれ、「寛」との間にキズがみられる。字形も太字のものと細字のものがある。259・264・265・268 ~ 270・272・277 は C 1 区壁成形中、261 は C 1 区土壌 24、260・262・263・273 ~ 276 は C 2 区現代土壌、266 は遺構検出中、267 は C 1 区機械掘削中、271 は C 3 区現代土壌、278・279 は C 1 区土壌 10 から出土している。

文久永寶 (280・281) 銭径 2.6 cm で、背面に波の模様が描かれる。280 は C 1 区壁成形中、281 は C 1 区現代土壌から出土している。

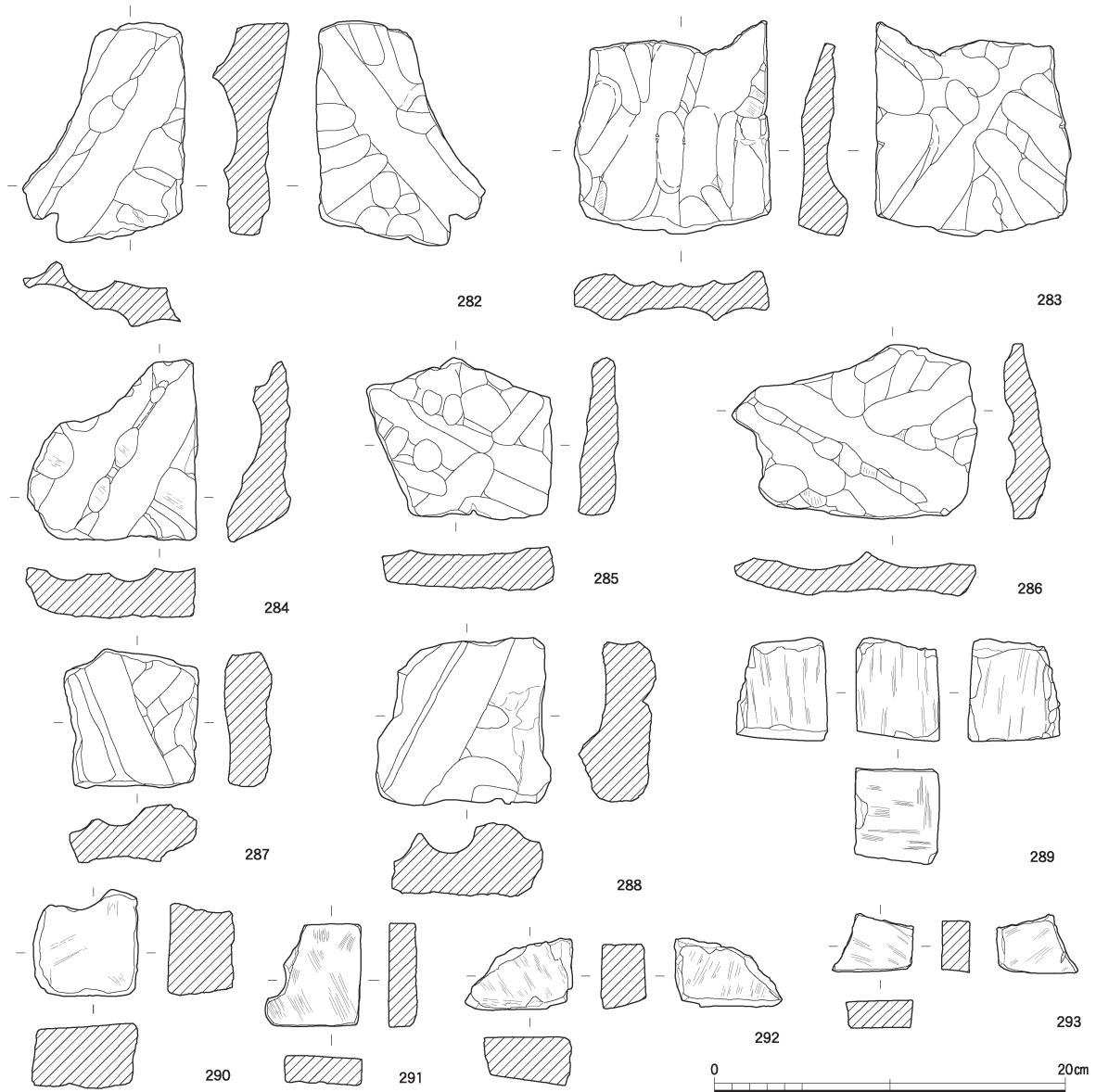


図 40 石製品実測図 (1 : 4)

### 3) 石製品 (図 40、図版 12)

砥石 (282 ~ 293) 出土した砥石には 2 種類ある。282 ~ 288 は一辺 9.0 ~ 13.5 cm の矩形の砥石に、断面が半円形の溝状の使用痕が認められるものである。ほとんどの使用痕が砥石の両対角線状に認められる。片面のみを使用したものと両面を使用したものがある。破損するまで使用されたとみえ、原形をとどめるものはない。表面に緑青が付着したものも多い。

289 ~ 293 は一辺約 6.0 cm の方形の砥石である。線状の使用痕が認められる第 1 類のものよりも小型の砥石である。片面のみを使用したものと両面を使用したものがある。289 は一辺 4.5 cm ・厚さ約 6.0 cm の直方体で、5 面を使用している。表面に緑青が付着したものもある。

図示した砥石は C 2 区の土壌 53 より出土したものであるが、同遺構からは総数 58 点の砥石が出土している。これらの砥石はすべて、錢を研ぐために使用されたものである。

### 4) 土製品 (図 41、図版 10)

泥面子 (294) 小児の玩具である泥面子である。型抜きによる成形で、裏面の中央に指圧痕が残る。表面は円圏内に小槌の絵がみられる。C 1 区の土壌 3 より出土している。

灯火具 (295・296) いわゆる「たんころ」と呼ばれる灯火具である。295 は乗燭形の「たんころ」で、内底面に円錐状の芯受けがはずれた痕跡が認められる。296 は上面に板状の粘土を貼り付け、中央に孔をあけて灯明の芯を通すようになっている。色調は 295 が灰色、296 が灰白色で、胎土・焼成は両者とも良好である。ともに C 1 区の土壌 3 より出土している。

ミニチュア (297・298) 軟質施釉陶器の高杯形のミニチュアである。全体に淡緑色の釉がかかり、杯の内側に濃緑色の釉が斑状に施されている。ともに C 1 区の土壌 3 より出土している。

窯道具 (299 ~ 307) 陶器を重ね焼きする時に使用する窯道具である。299 は小型の円筒形のもので、体部中央に 1 箇所径 3 mm の小孔を穿つ。300・301 は輪トチンで、三足の張ピンが取り付け。302 ~ 307 は円盤状のハマで 3 箇所に張ピンが付く。すべて C 1 区の土壌 3 より出土している。

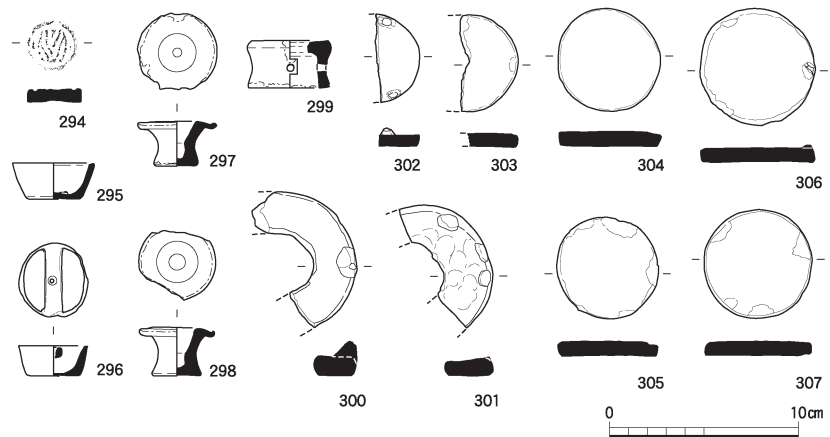


図 41 土製品実測図 (1 : 4)

## 5. ま と め

今回の調査で、八条大路の存在が発掘調査で初めて確認できた。また、東洞院大路と八条大路の交差点を確認することができた。しかし、東西方向に走る東洞院大路が条坊復元推定位置とほぼ同じ場所に築かれていることに対し、八条大路は、推定位置より南に約3～4mずれて築かれていることがわかった。さらに、東洞院大路が小礫と土師器皿の細片を搗き固めてしっかり整備されていることに対し、八条大路は舗装面を確認することができず、側溝を掘って区画されているだけであり、側溝そのものも真っ直ぐに造られてはいない。交差点部分においても、東洞院大路東側溝が八条大路北側溝と合流することなく、八条大路の路面を貫通して流されている。このことから、東西方向街路と南北方向街路では整備状況に大きな違いが見られ、明らかに南北方向街路を優先する考えが存在したと思われる。

また今回の調査では、旧高瀬川を境にして東側と西側で遺構の様相が大きく異なっていた。西側では地山の砂礫層に遺物は存在せず、上面で平安時代の遺構を確認することができた。東側では洪水によってもたらされた、遺物を包含した砂礫層が厚く堆積し、室町時代以前の遺構は全く確認できなかった。鴨川の度重なる氾濫の結果、室町時代以前の遺構は洪水によって全て流出したと考えられる。このことから、旧高瀬川は室町時代以降の氾濫源の西限に開鑿されたと思われる。しかし平安時代の遺構を検出した西側のA区も地形的に不安定な地点であったと思われ、遺構の密度は低く、東洞院大路と八条大路に囲まれた宅地に井戸1基と土器溜り2箇所を含む若干の土壌を検出したが、建物跡を検出することはできなかった。八条院領が四町の北西部のみを占地する事実と符合する現象と思われる。室町時代になっても、東洞院大路は舗装を行い、整備し踏襲されているが、八条大路の北側溝はさらに南に移り、道路幅は狭まっている。また、依然遺構密度も低く、土壌・井戸などは検出したが、建物跡は確認できなかった。しかし、室町時代の側溝沿いに柵列と考えられる柱穴、土壌が存在していることから、土地を区画する必要があったものと思われる。

B・C区では、鴨川の氾濫・洪水が繰り返された後に土地が安定するのは江戸時代になってからで、まず耕作地が営まれ、江戸時代後期になって溝や土壌などが形成される。また、直接鑄造関連の遺構を検出しなかったが、C区で大量の炉壁・ルツボ・取瓶・砥石・スラッグが出土している。付近に銭座の存在が想定されるため、関連の遺物と考えられる。京都の銭座は、京都糸割符年寄の長崎屋忠七など五名の請負によって、元禄十三年(1700)三月に始まり、宝永五年(1708)正月に鑄銭事業は停止された。鑄造期間である9年間に総額1,736,684貫の銭を鑄造している。また、宝永四年から同五年までに寶永通寶銅十文銭いわゆる大銭を約十萬貫鑄造している<sup>1)</sup>。銭座が立地するのは、七条通高瀬川際の妙法院宮領の6,400坪の土地とされるが、元禄十四年(1701)の絵図<sup>2)</sup>(図42)によれば、河原町通以東、八条通以北、須原通以西の地に比定される位置に銭鑄場と記されている。調査地の河原町通を隔てたすぐ東隣である。

銭座で使用されたと思われる砥石には2種類あり、一つは断面半円形の溝状の使用痕が縦横に認められる砥石で、片面のみを使用したものと両面を使用したものがある。破損するまで使用さ

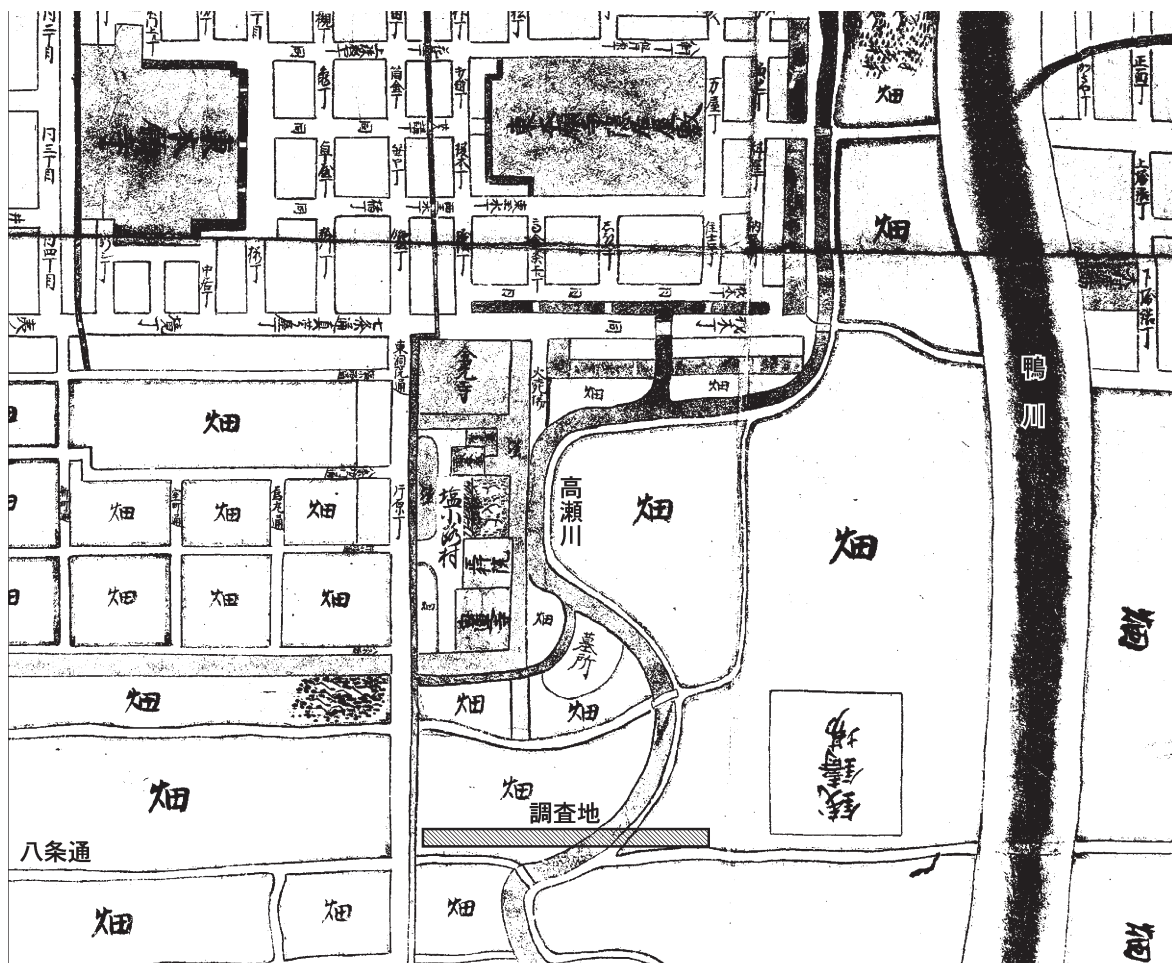


図 42 「京師大絵図」（慶應義塾大学古文書室所蔵）に描かれた銭座  
「元禄十四年實測大絵図（後補書題） 元禄 14（1701）年」『慶長 昭和 京都地図集成』より抜粋、加筆修正し転載した。

れたとみえ、溝は深く原形をとどめるものはない。他は浅い凹みの使用痕が認められる第 1 類のものよりも小型の砥石である。断面半円形の砥石は耳（銭の周縁）を研ぐためのもの、小型の砥石は銭面を研磨するのに使用された。どちらも材質は砂岩である。砥石は、総数で 273 点出土している。内訳は第 1 類のものが 192 点、第 2 類が 42 点、不明 27 点である。

美濃・瀬戸陶器の鉄釉の筒形の甕で、銭甕または半胴甕と呼ばれるものが大量に出土している。底部は糸切りの平底で、底部を除く全面に厚さ 1 mm 前後の鉄釉・柿釉が施されている。文献によれば、銭甕とは「銭を铸る坩堝あるいは商家の小銭入れ容器とされるが実際の用途は不明」とされる<sup>3)</sup>。出土した銭甕の大半は高熱によって生じたと思われる変化は認められないが、すべて破片で完形品は 1 点もない。また、釉が融解したものや、器表外面に貼り付けられた粘土が熱変したものがみられる。変化のないものにも、銅滓や緑青が付着したものが多くみられる。しがって、ルツボあるいはトリベとして利用されているのは明らかである。これにより、不明とされていた銭甕の用途が判明し、それが京都の銭座で使用されたことが確認された。

出土した銭座関連の遺物は、調査地の立地、铸造関連の遺構を検出されなかつたことなどから、銭座で使用された不用品を敷地外に大量に廃棄したものと思われる。

註

- 1) 小葉田 淳『日本の貨幣』至文堂 1958年
- 2) 「元禄十四年實測大絵図（後補書題）元禄14（1701）年」『慶長 昭和 京都地図集成 1611（慶長16）年～1940（昭和15）年』柏書房 1994年
- 3) 『江戸時代の瀬戸窯』財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター 2002年



# 版 图



# 報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょうさきょうはちじょうしぼうよん・ごちょうあと							
書名	平安京左京八条四坊四・五町跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2006-20							
編著者名	木下保明・近藤章子・西森正晃							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2007年3月15日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうさきょう 平安京左京 はちじょうしぼう 八条四坊 よん・ごちょうあと 四・五町跡	きょうとしみなみくひがし 京都市南区東 くじょうひがしさんのうちょう 九条東山王町 ほかちない 他地内	26100		34度 59分 04秒	135度 45分 42秒	2006年8月 1日～2006 年12月22日	1,385㎡	道路改築 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京左京 八条四坊 四・五町跡	都城跡	平安時代末期 ～鎌倉時代	東洞院大路路面・東 側溝・東築地内溝、 八条大路北側溝、 井戸、土壇	土師器、瓦器、製塩土 器、輸入磁器、焼締陶 器、瓦		平安時代末期～鎌 倉時代の東洞院大 路路面・東側溝・ 東築地内溝、八条 大路北側溝、室町 時代の八条大路北 側溝を検出した。 江戸時代の銭铸造 関連の遺物が出土 した。		
		室町時代	八条大路北側溝、 井戸、土壇	土師器、瓦器、輸入磁 器、施釉陶器、焼締陶 器				
		江戸時代	耕作土、包含層、 土壇、溝	土師器、土師質土器、 染付、磁器、軟質施釉 陶器、施釉陶器、焼締 陶器、木製品、銭貨、 金属製品、石製品、土 製品				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-20  
平安京左京八条四坊四・五町跡

発行日 2007年3月15日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所  
発行 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1  
住所 〒 602-8435 TEL 075-415-0521  
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地  
〒 604-0093 TEL 075-256-0961